



第4トレンチ北区（南から）



第4トレンチ南区 第1調査面（北から）



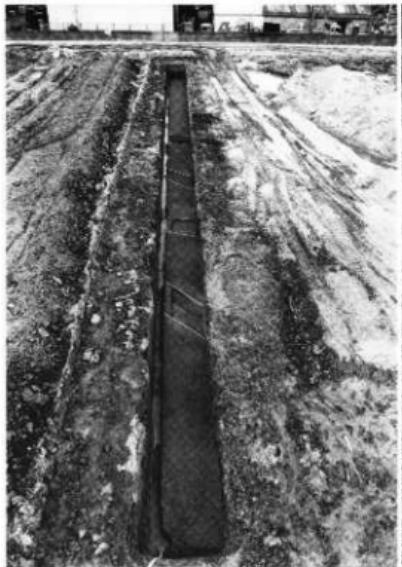
第4トレンチ南区 第2調査面（北から）



第4 トレンチ南区 SD-11北部遺物出土状況（東から）



同上 SD-11南部遺物出土状況（東から）



第5 トレンチ北区（南から）



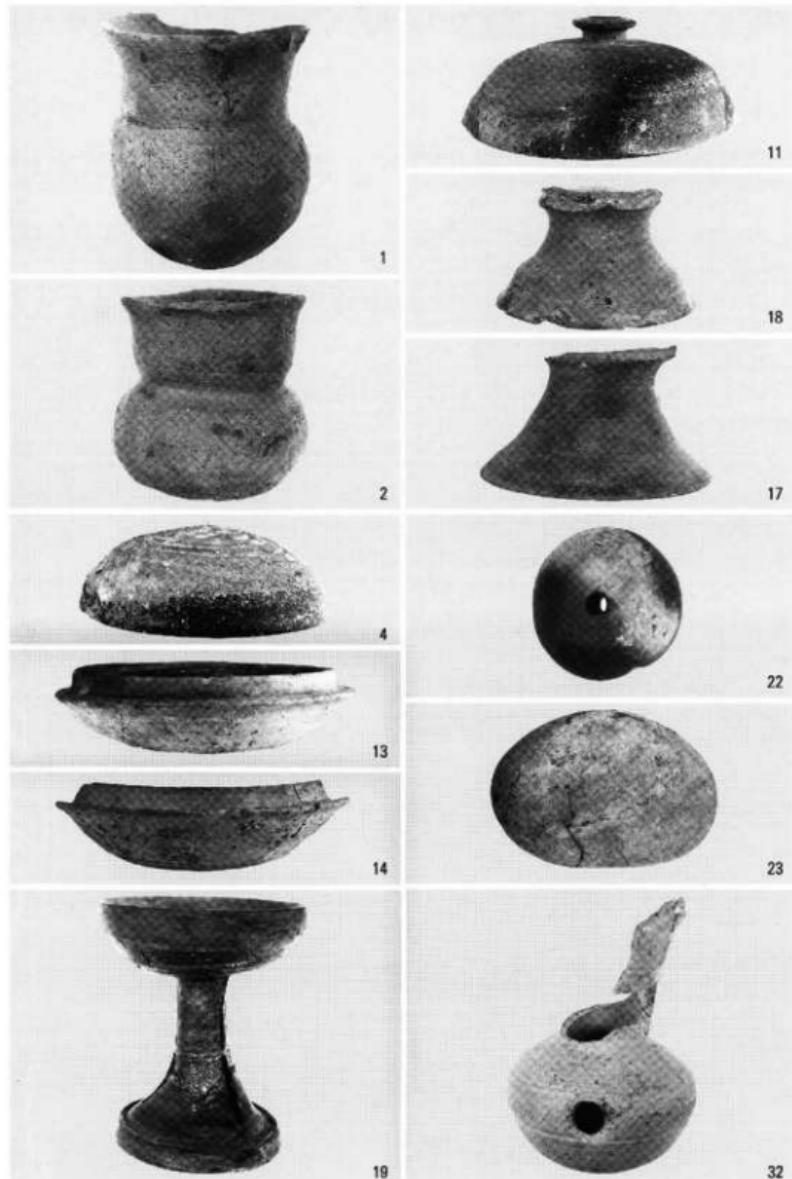
第6 トレンチ（東から）



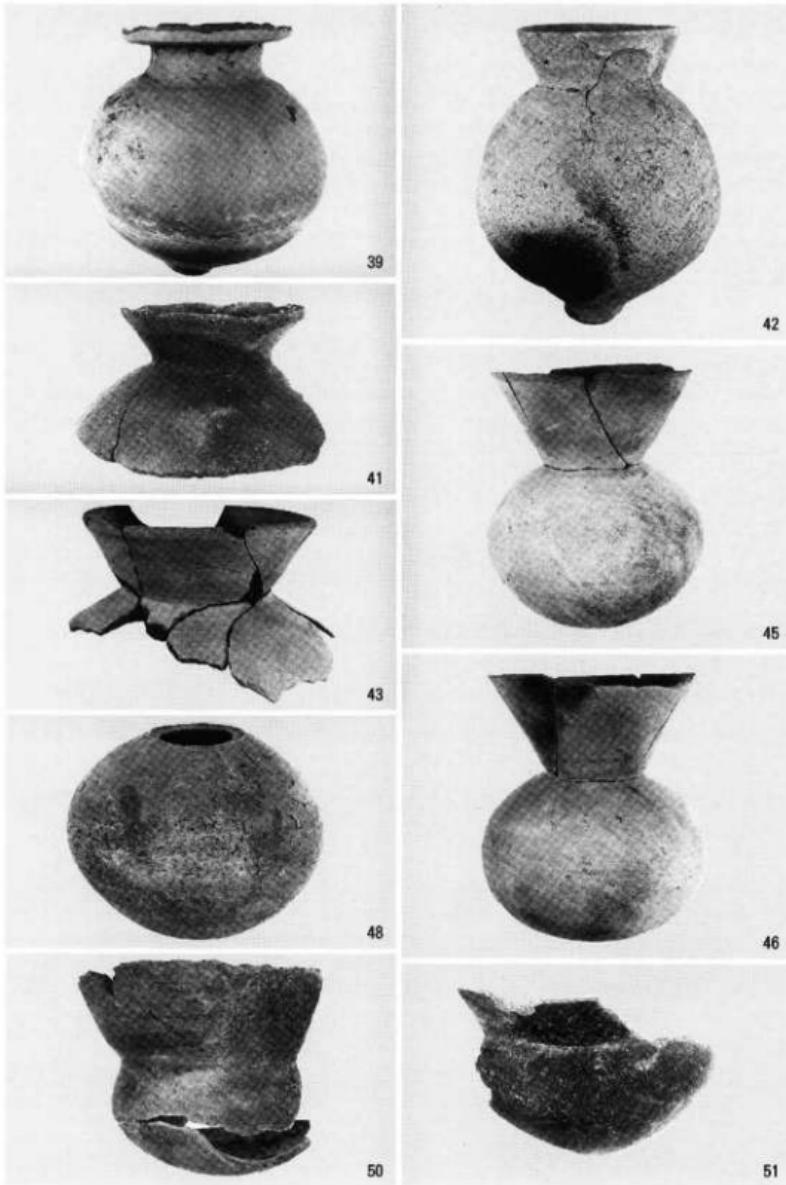
第5 トレンチ南区（北から）



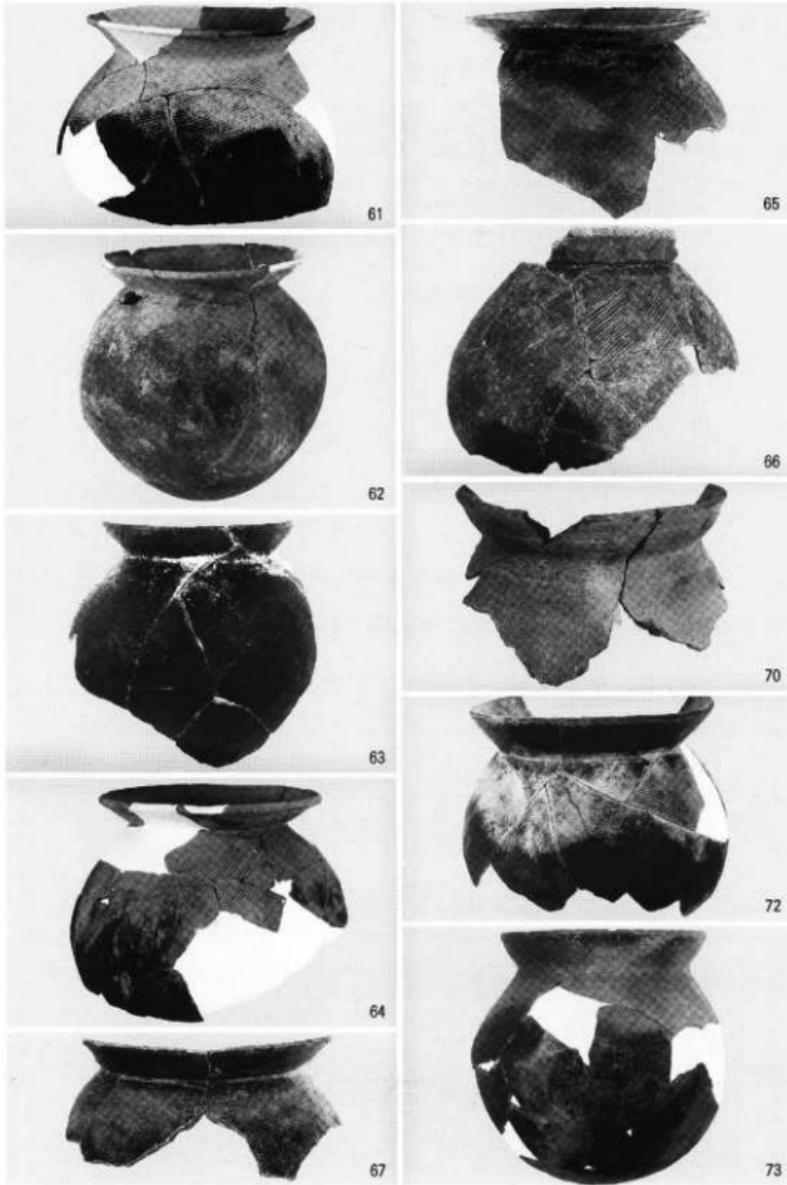
第7 トレンチ（東から）



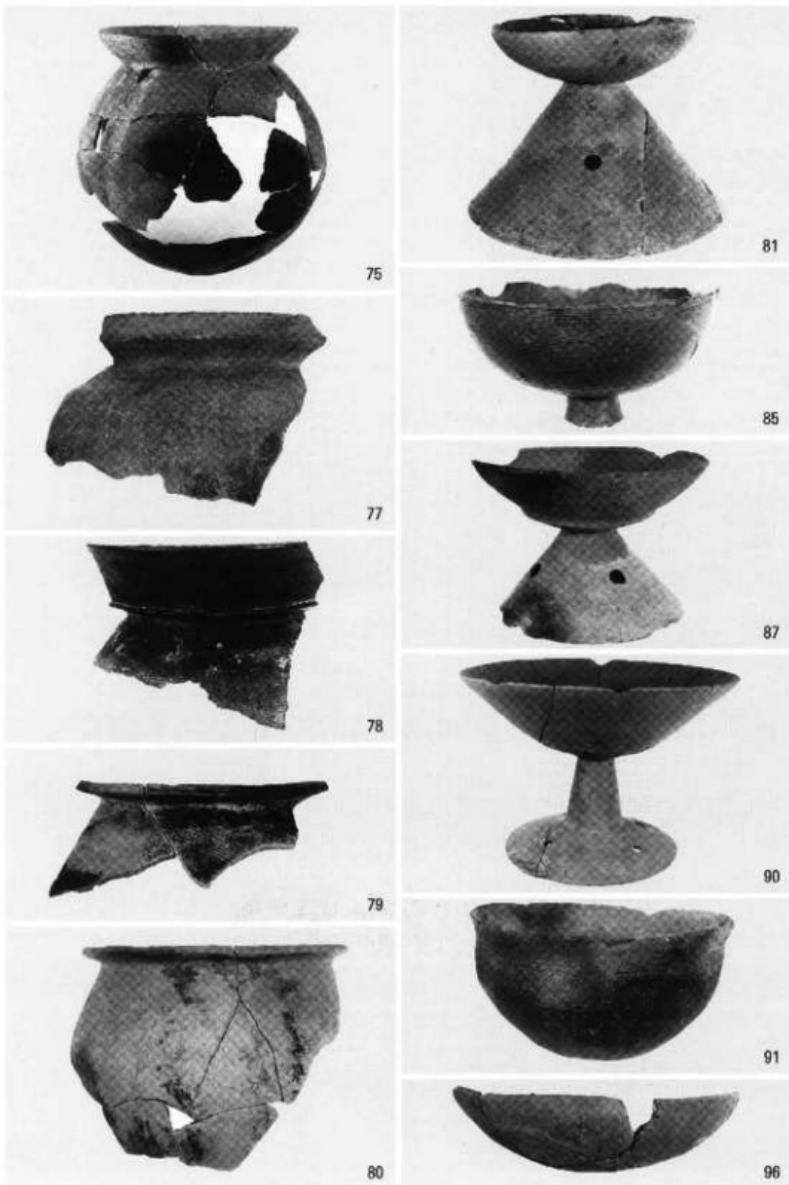
第1トレンチ南区 SE-1、第4トレンチ SD-6 (32) 出土遺物



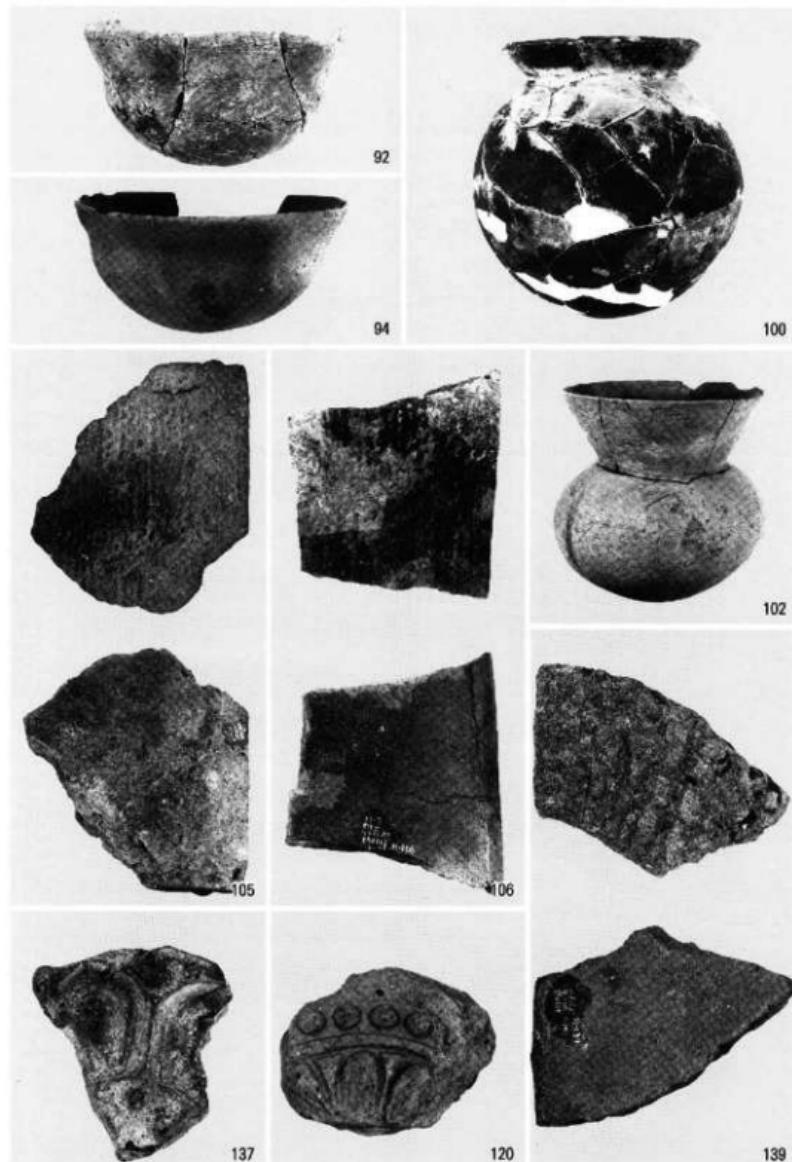
第4 トレンチ SD-11出土遺物



第4 トレンチ SD-11出土遺物



第4トレンチ SD-11出土遺物



第4トレンチ SD-11 (92・94)、第6トレンチ SD-11 (100・102)、第4トレンチ SP-38 (105・106)、
第3トレンチ包含層 (120)、第7トレンチ包含層 (137・139) 出土遺物

III 萱振遺跡第13次調查 (K F 92-13)

例　　言

1. 本書は、八尾市幸町3丁目80、83で実施した改良住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する発掘遺跡第13次調査（K F92-13）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第125号 平成4年10月28日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成5年2月1日から3月11日（実働30日間）にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は327m²を測る。調査においては井上千枝子・垣内洋平・福島友香・森本智子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成8年3月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－北原清子・沢村妙子・田畠和恵・辻野優子・吉田由美恵、図面トレース－北原・遺物観察表－北原・原田、遺物写真撮影－原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。
1. 一部の土器胎土および石材鑑定については、八尾市立曙川小学校教諭奥田尚氏に依頼した。

本　文　目　次

第1章 調査に至る経過	113
第2章 調査概要	114
第1節 調査の方法と経過	114
第2節 基本層序	115
第3節 検出遺構・出土遺物	116
1) 第8層上面検出遺構（第2調査面）	116
2) 第7層上面検出遺構（第1調査面）	131
3) 第7層出土遺物	133
第4節 出土遺物観察表	137～144
第3章 まとめ	145

挿図目次

第1図 調査地周辺図	114
第2図 調査区設定図	115
第3図 S I - 201半断面図	116
第4図 検出遺構半断面図	117・118
第5図 S K - 201半断面図	119
第6図 S K - 201、S K - 202出土遺物実測図	120
第7図 S K - 206半断面図	121
第8図 S K - 206出土遺物実測図	121
第9図 S O - 201出土遺物実測図 - 1	127
第10図 S O - 201出土遺物実測図 - 2	128
第11図 S O - 201出土遺物実測図 - 3	129
第12図 S O - 201出土遺物実測図 - 4	130
第13図 S O - 201出土遺物実測図 - 5	131
第14図 S D - 102出土建築部材半断面図	132
第15図 S D - 102出土遺物実測図	132
第16図 第7層出土遺物実測図 - 1	134
第17図 第7層出土遺物実測図 - 2	135
第18図 第7層出土銅鑼実測図	136

写真目次

写真1 調査風景	113
----------------	-----

図版目次

- 図版 一 第2調査面全景（西から）
- 図版 二 第1調査面全景（西から）
- 図版 三 第2調査面東部遺構検出状況（北から）
 - 同 上 S I - 201検出状況（東から）
- 図版 四 第2調査面 S K - 201検出状況（北から）
 - 同 上 S K - 206検出状況（西から）
- 図版 五 第1調査面 S D - 101～103検出状況（北から）
 - 同 上 S D - 102建築部材出土状況（東から）
- 図版 六 S K - 201、S K - 206、S O - 201出土遺物
- 図版 七 S O - 201出土遺物
- 図版 八 S O - 201出土遺物
- 図版 九 S O - 201出土遺物
- 図版 一〇 S O - 201出土遺物
- 図版 一一 第7層出土遺物
- 図版 一二 S D - 102、第7層出土遺物

第1章 調査に至る経過

豊振遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積池に位置する弥生時代中期から室町時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市の中央部から北部に位置する緑ヶ丘1~3丁目、旭ヶ丘5丁目、豊振町1~7丁目、北本町3・4丁目、楠根町1・4丁目、泉町1~3丁目、桂町1・2丁目、幸町1・3・4・6丁目一帯の東西0.5~0.9km、南北2kmがその範囲とされている。

今回、発掘調査を実施した豊振遺跡の北部では、泉町2丁目に鎮座する天神社を中心として、古代寺院である西郡廃寺跡が想定されている。昭和55年度以降、この周辺では、八尾市教育委員会による小規模な発掘調査が行われており、屋瓦類を中心とした遺物から西郡廃寺の変遷の一端が推定されるようになってきた。さらに、昭和58年度には、豊振町7丁目で大阪府教育委員会により府立八尾北高校の建設に伴う発掘調査が実施されたのを始めとして、昭和59年度には当調査研究会が天神社の東側の幸町1丁目76で第1次調査(KF84-1)、昭和63年度には幸町1丁目60-1で第6次調査(KF88-6)が実施してきた。これら一連の調査では、弥生時代後期から室町時代に至る遺構・遺物が確認されたほか、西郡廃寺に関連した屋瓦が遺跡範囲北部の広範囲にわたって検出されており、寺域の推定や存続時期を推定するうえで貴重な資料を提供する結果となった。

このような情勢下、第6次調査地(KF88-6)の北80m地点において八尾市改良事業室から住居建設をする旨の届出書が八尾市教育委員会文化財課に提出された。その後、対象地において平成4年10月20日に八尾市教育委員会文化財課により遺構確認調査が実施された結果、古墳時代前期と中世遺物を包含する土層の存在が確認された。これらの経緯を経て発掘調査を実施するに至ったもので、発掘調査の業務は八尾市・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会の三者間で締結された協定書に基づいて当調査研究会が八尾市から委託を受けて行った。現地調査の期間は平成5年2月1日~3月11日までの30日間である。調査面積は372m²を測る。報告書作成に関する業務は、現地調査の終了後、平成8年3月31日まで随時実施した。



写真1 調査風景

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

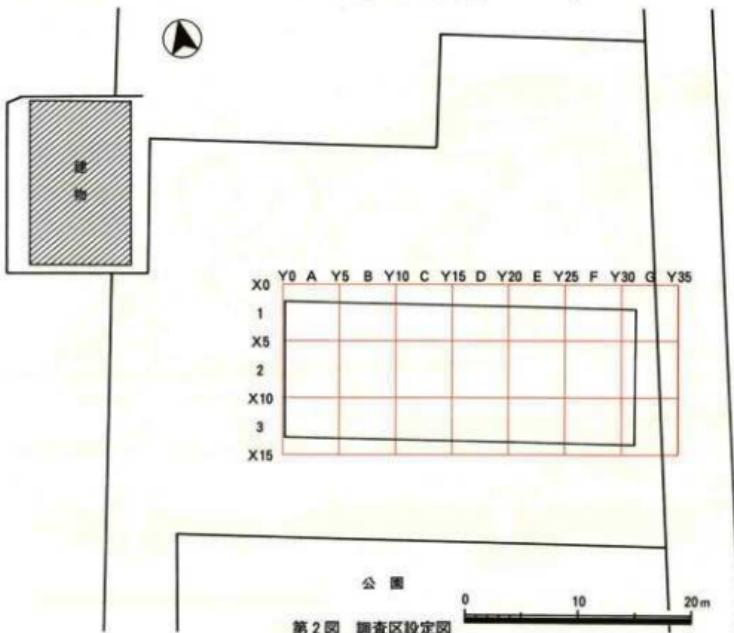
今回の発掘調査は改良住宅建設に伴うもので、調査区の規模は東西31m、南北12mを測る。調査地の地区割りは、調査地の北西隅のX 0・Y 0地点を基点として東西35m、南北15mにわたりて設定した。一区画の単位は5m四方で、東西方向はアルファベット（西からA～G）、南北方向は算用数字（北から1～3）で示し、地区的表示は1 A～3 G区と呼称した。地点の表示には、東西線（X 0～X15）・南北線（Y 0～Y35）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、表上下1.5m前後までを機械掘削した後、以下0.5mについては層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、表上下1.7m前後（標高3.3m前後）に存在する第7層上面で、古墳時代後期初頭に比定される土坑1基（SK-101）、溝4条（SD-101～104）、小穴1個（SP-101）を検出した（第1調査面）。さらに0.2m下部に存在する第8層上面（標高3.1m）で、弥生時代後期の竪穴住居1棟（SI-201）、土坑8基（SK-201～208）、落ち込み1箇所（SO-201）、溝2条（SD-201・SD-202）、小穴13個（SP-201～213）を検出した（第2調査面）。遺物は遺構内および第7層からコンテナ10箱程度出土している。なお、2 E区の第7層からは銅鏡1点が出土している。



第1図 調査地周辺図

第2節 基本層序

- 第0層 盛土。層厚0.6~0.8m。上面の標高はT.P.+5.00m前後。
- 第1層 旧耕土。N 6 / 0 灰色極細粒砂~細粒砂。層厚0.2m前後。北壁では欠損している。
- 第2層 5 B 6 / 1 青灰色粘質土。層厚0.1~0.2m前後。
- 第3a層 10B G 7 / 1 暗青灰色粘質土。層厚0.1~0.2m前後。
- 第3b層 7. 5Y 6 / 2 灰オリーブ色粘質土。層厚0.25m前後。
- 第4層 N 7 / 0 灰白色極細粒砂。層厚0.15m。
- 第5層 10G Y 7 / 1 明緑灰色極細粒砂。層厚0.1m。古墳時代後期の遺物を少量含む。
- 第6層 10Y R 7 / 4 にぶい黄褐色極細粒砂。層厚0.1m。
- 第7層 N 3 / 0 暗灰色細粒砂。層厚0.15~0.3m。弥生時代後期の遺物を含む。上面が第1調査面。
- 第8層 10B G 7 / 1 暗青灰色シルト~中粒砂。層厚0.15~0.4m。上面が第2調査面。
- 第9層 5 G Y 8 / 1 ~10G Y 8 / 1 明緑灰色極細粒砂~細礫。河川堆積層。層厚0.5m。
- 第10層 N 6 / 0 灰色~10G Y 7 / 1 明緑灰色粘土。層厚0.1~0.4m。



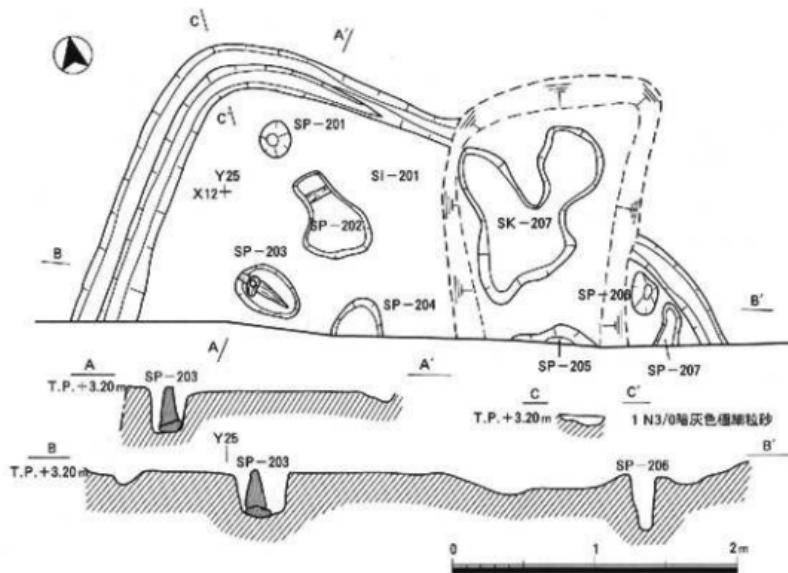
第3節 検出遺構・出土遺物

1) 第8層上面検出遺構（第2調査面）

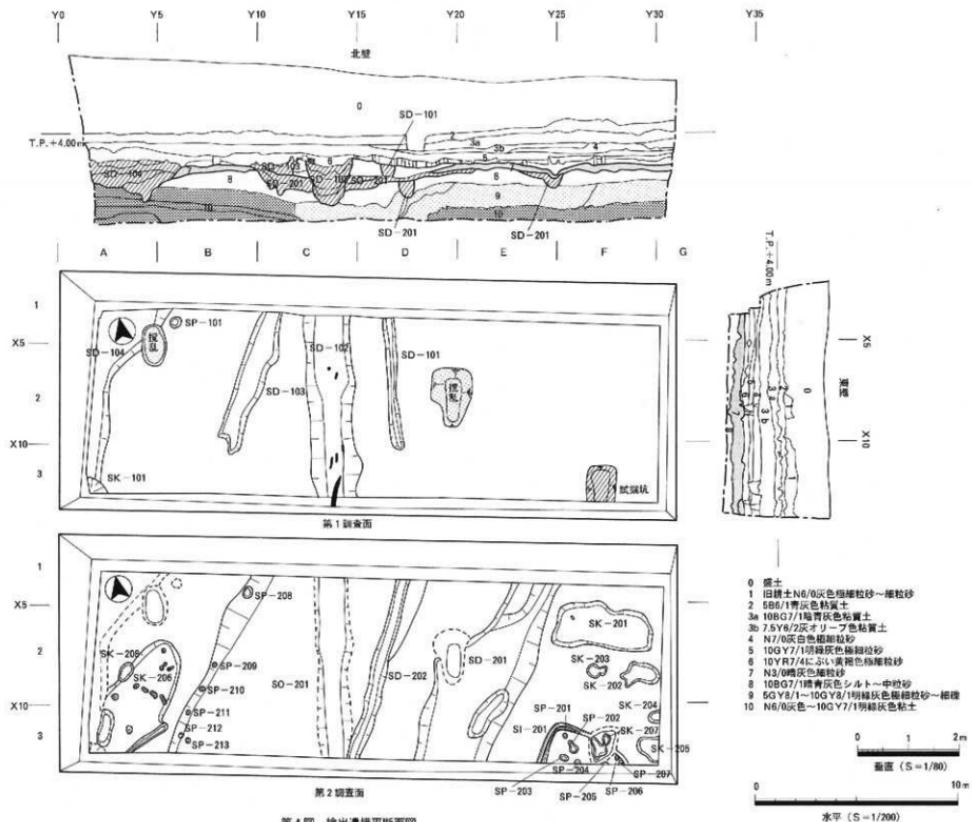
竪穴住居（S I）

S I - 201

3E・F区で検出した。南部は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分からみて隅丸方形の竪穴住居と推定される。検出部分で東西幅4.4m、南北幅1.9mを測る。住居内に堆積する暗灰色極細粒砂を検出面から0.1m程度除去すると、床面を構成する暗青灰色シルトに達する。この層上面で小穴・壁溝を検出した。小穴は7個（SP-201～207）が検出されており、その中のSP-202からは柱根が検出された。SP-202の柱根の構造は、柱穴の底部に別材を水平に設置した後、二段に加工した柱の根を組み込む構造のものである。また、SP-203もSP-202と同様、底部に木材が設置されており、柱穴であった可能性が高い。ともに、位置からみて主柱を構成した柱根であることから、少なくとも2回の建て替えが行われたことが推定される。壁溝は住居の輪郭に沿って巡らされており、西部から北西部にかけてやや幅広になっている。断面逆台形で、幅0.14～0.41m、深さ0.05～0.12mを測る。埋土は暗灰色極細粒砂である。住居内埋土および壁溝内から、弥生時代後期の土器類が極少量出土している。



第3図 S I - 201平面図

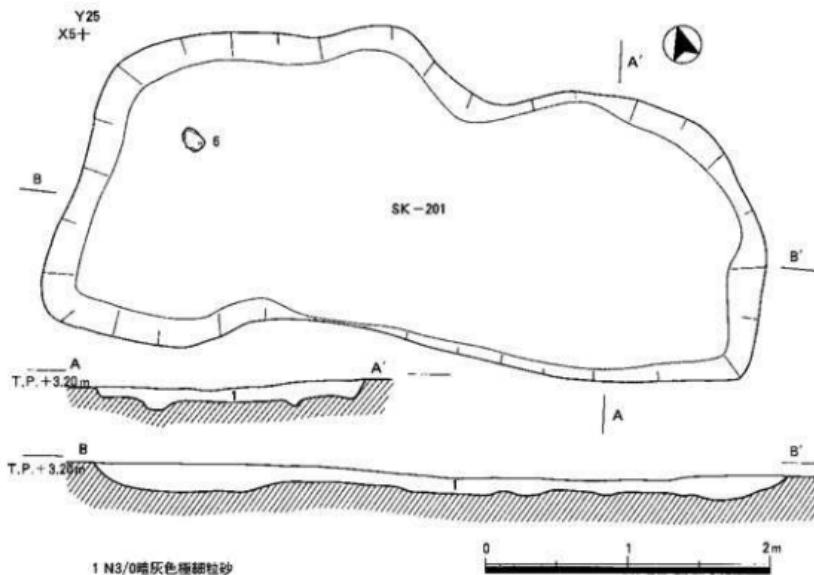


第4図 掘出断面平面図

土坑 (SK)

SK-201

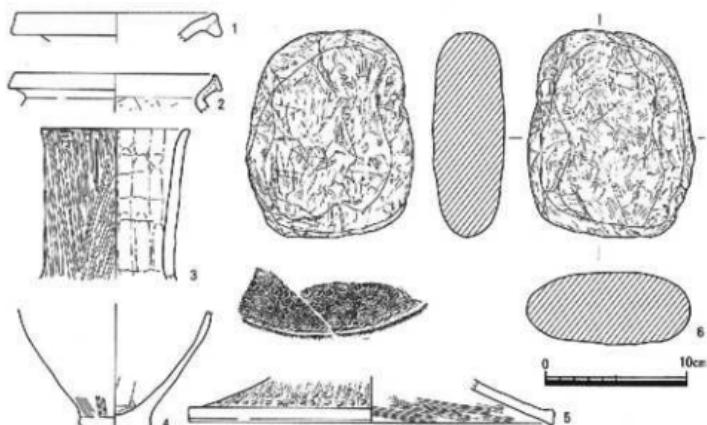
2F区で検出した。上面の形状が東西方向に長い不定形を呈する大型の上坑である。東西幅4.9m、南北幅1.8~2.0m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰色極細粒砂である。遺物は弥生時代後期に比定される壺・甕等の土器類が少量出土したほか、台石1点が出土している。そのうち、図化し得たものは5点(1・2・4~6)である。(1)は広口壺の口縁部が1/2程度が遺存している。端部は垂下し幅広の端面を有している。復元口径14.7cmを測る。口縁部端部の一部に赤色顔料が塗布されている。(2)も(1)と同規模が遺存する壺である。口縁部端部は上下に肥厚し内傾する幅広の端面を有している。復元口径13.9cmを測る。(4)は壺の底部で、体部下半に縦方向のハケナデが施されている。底径5.1cmを測る。(5)は高杯の裾部と推定される。裾部外面には半裁竹管文を一段に施文している。復元裾径25.4cmを測る。出土した上器群は胎土に長石・石英・黒雲母・角閃石を含み褐色系を呈する生駒西麓窯である。(6)は不整形を呈する台石で、両面はほぼ水平な面を呈している。横幅11.5cm、縦幅14.6cm、厚さ5.2cm、重さ1.2kgを測る。石材はチャートである。



第5図 SK-201平面図

SK-202

2F区で検出した。上面の形状が不定形を呈するもので、東西幅1.85m、南北幅0.8~1m、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰色極細粒砂である。遺物は弥生時代後期に比定される壺等の小破片が数点出土している。遺物は1点(3)を図化した。(3)は長頸壺の口頸部である。口径10.3cm、頸部高10.7cmを測る。褐色系を呈するもので生駒西醍醐である。



第6図 SK-201 (1・2・4~6)、SK-202 (3) 出土遺物実物図

SK-203

2F区で検出した。上面の形状が不定形を呈するもので、東西幅0.9m、南北幅0.32~0.68m、深さ0.05mを測る。埋土は暗灰色極細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK-204

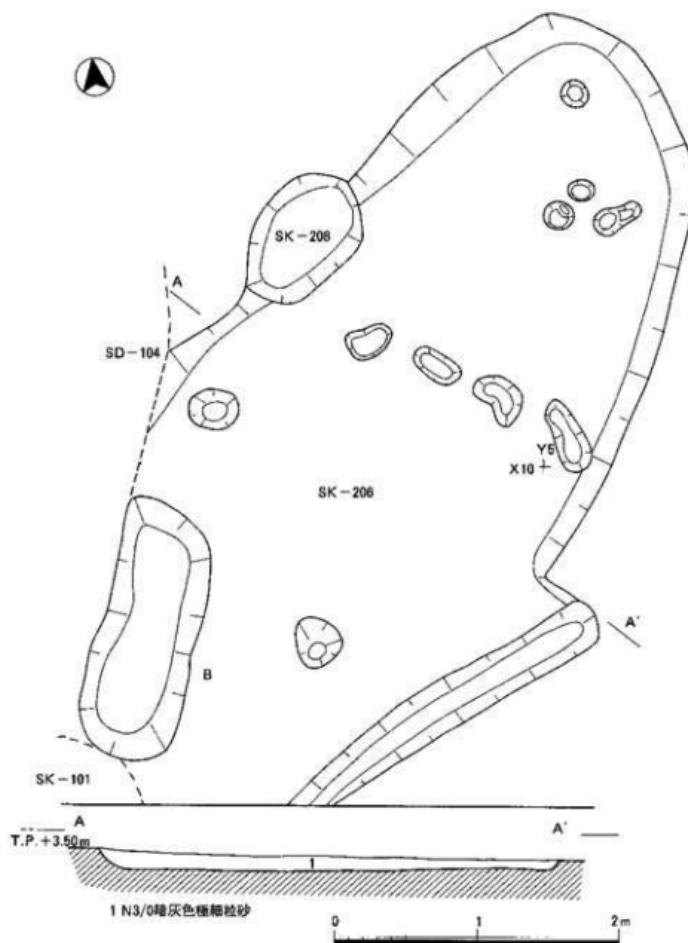
2F区で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅0.6m、南北幅0.64m、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰色極細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK-205

調査区の南東隅で検出した。東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅1.1m、南北幅1.28m、深さ0.14mを測る。埋土は暗灰色極細粒砂である。遺物は出土しなかった。

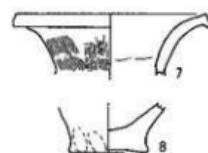
SK-206

調査区の南西部で検出した。検出部分では、南北方向に展開する土坑であるが、南西部はSD-104・SK-101・SK-208に切られ南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅3.5m、南北幅6.35m、深さ0.11mを測る。掘形の断面形状は逆台形で底面は



第7図 SK-206平面図

ほぼ水平である。底辺には小穴10個・土坑状遺構1基・溝状遺構1条が存在している。埋土は暗灰色極細粒砂である。遺物は弥生時代後期に比定される帯・壺等の小破片が少量出土している。2点(7・8)を図化した。(7)は広口壺の口縁部である。外反して伸びる口縁端部を下方に拡張して端面を有する。



第8図 SK-206出土遺物実例図

約1/3程度が遺存しており復元口径13.3cmを測る。(8)は甕の底部で底径は5.4cmを測る。(7・8)はともに生駒内腹座である。

SK-207

3F区で検出した。SK-201の北東部を切っている。上面の形状が不定形を呈するもので、上部が近世に搅乱を受けており本来の構築面は不明である。東西幅0.7m、南北幅1.13m、深さ0.05mを測る。堆土は暗灰色極細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK-208

2A区で検出した。SK-206の西部を切っている。上面の形状が梢円形を呈するもので、長径1.04m、短径0.68m、深さ0.17mを測る。埋土は暗灰色極細粒砂である。遺物は出土しなかった。

落ち込み(SO)

SO-201

調査区の中央部で検出した。南北方向に溝状に展開するもので、東西幅8.6m、深さ0.6mを測る。西側の斜面部分に小穴が南北方向に6個(SO-208~213)並んで検出されており、この部分に柵列等の施設が存在した可能性が考えられる。埋土は上層から青灰色粘質シルト・オリーブ灰色シルト・暗灰色極細粒砂である。遺物は最下層の暗灰色極細粒砂から弥生時代後期前半から古墳時代前期初頭(庄内式期古相)の土器類が出土したが古墳時代前期初頭(庄内式期古相)は少量で、大半が弥生時代後半前に比定されるものである。量的には、コンテナ8箱程度出土している。出土した土器類は大半が小片で完形のものは少ない。遺物の出土状況や堆積土層からみて、溝地状を呈するこの部分が弥生時代後期前半から古墳時代前期初頭(庄内式古相)に至る期間、廃棄場として利用されていたことが窺われる。図化した遺物は81点(9~89)で、土器類が80点、石材が1点である。

広口壺(9~13・22)

広口壺は6点(9~13・22)図化した。口頭部が外反して伸び、端部が下方に拡張する(9~11)と頭部が内傾ないしは上方に小さく伸びた後外反して口縁端部が下方に大きく拡張する(12・13)がある。(9・11)は口縁部の大半が遺存している。(11)が搬入品の可能性があるが他は生駒内腹座である。(12)は口縁部の1/4、(13)は口縁部が完存している。口径は(12)が14.5cm、(13)が15.0cmを測る。(22)は広口壺の底部と推定される。底径5.1cm、体部最大径23.0cmを測る。

広口長頸壺(14・15)

2点(14・15)図化した。(14)は広口長頸壺の口縁部で端部が下方に大きく垂下し、幅広の端面を構成している。端面外面には波状文が施文されている。(15)は口縁部を欠損するが

頸部の立ち上がりの方向からみて、口縁部が大きく外反する広口長頸壺と推定される。口頸部と体部上半の境に張り付け凸帯が廻る。(14・15)ともに色調は褐色系で、生駒西麓産である。

長頸壺 (16~21)

長頸壺は6点(16~21) 図化した。球形の体部に筒形の口頸部が付くもので、口頸部の形状で区別すれば、口縁部付近からゆるやかに広がるものが多く、その他にはほぼ直上に伸びた後口縁部が小さく屈曲する(20)がある。(18)の口縁端部外面には強いヨコナデにより、段状を呈する凹線が廻る。各部位の数値は口縁径では9.8~11.6cm、頸部高では7.7~9.3cmを測るやや短めの(16~18)と11.6~13.6cmを測るやや長めの(19・20)がある。体部においては、底径5.0cm前後、体部高14cm前後、体部最大径15.5~17.1cmを測る(17・21)がある。(17)が灰白色の色調で非生駒西麓産である。(16・18~21)はいずれも褐色系の色調を呈する生駒西麓産である。

短頸壺 (23~25)

(23・24)は扁球形の体部に斜上方に直線的に伸びる口頸部が付くもので、底部は突出した半底を有する小型の壺である。(23)は口縁部を欠く以外は完存している。体部外面上半に「へ」の字状のヘラ記号が施文されている。(24)は(23)に比して口頸部が大きく開く短頸壺である。復元口径10.9cm、体部最大径12.6cmを測る。(23・24)ともに生駒西麓産である。(25)は体部最大径を中位に持つ扁球形の体部から口縁部が直上に伸びるものである。口縁端部は擬口縁状を呈する。褐色系を呈する生駒西麓産である。

細頸壺 (26)

体部の一部を欠く以外はほぼ完存している。口径10.4cm、器高29.0cm、体部最大径18.8cmを測る。突出する底部に扁球形の体部が付くもので、口頸部は細く鉢状に伸び上方ではラッパ状に広がっている。全体に成形・調整とともに丁寧な造りである。口頸部外面に柳描直線文が4条施文されているほか底部外側面にも2本の直線文が施文されている。生駒西麓産である。

小型壺 (27)

(27)は口縁部の1/8程度が遺存する近江地方を中心と分布が見られる小型壺である。受け口状を呈する口縁部外面に刺突文の斜線を施文するほか、体部外面上位に多条の直線文が廻っている。外面が褐色、内面が灰黄褐色である。

その他の壺形土器 (28・29)

(28)は壺体部上半の小片である。広口壺ないしは複合口縁壺と推定されるが詳細は不明である。体部上半に柳描直線文と波状文で構成される模様帶を有する。(29)はおそらく広口壺の底部と推定されるもので、底部中位以下の1/4程度が遺存している。(28・29)ともに生駒西麓産である。

甕 (30~52)

口縁部形態および外面調整の違いから 6 種 (甕 A・甕 B₁・甕 B₂・甕 C・甕 D・甕 E) に分類した。

甕 A (30~39)

(30~39) は口縁端部が内傾し、幅広の端面を有する甕である。いずれも 1/12~1/8 程度の小片である。口径 11.1~20.2cm を測る。外面の調整は (32・36・39) が細いハケナデの他はナデ。内面は (32・34・37・39) がヘラケズリで他はナデである。また、(39) のように口縁端面に 2 本の凹線が廻るものがある。すべて褐色系を呈するもので、生駒西麓産である。

甕 B₁ (40・42・43)

(40・42・43) は、口縁端面が内傾する面を有するが (30~39) のように幅広の端面を持たない。(40) は全体の 1/2 程度が遺存している。長胴形の体部を有するもので体部最大径は中位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し、端部は内傾する面を有する。体部中位および下位にハケナデが認められるが全体に風化が進んでおり不明な点が多い。赤褐色の色調で、胎土中にやや大粒の長石・石英粒が多量含まれている。(42) は、中型品である。(43) は口径 12.8cm、体部最大径 15.6cm を測る小型品である。体部外面はハケナデ、内面はヘラケズリが行われている。体部外面全体に煤の付着が認められる。(42・43) ともに生駒西麓産である。(43) については庄内期古相の所産と考えられる。

甕 B₂ (41)

(41) は体部外面調整においては甕 B₁ と同様ハケナデを行う点では共通しているが、口縁端部が面を持たず丸く終る点で甕 B₁ と区別した。(41) は小型品で口径 11.9cm を測る。生駒西麓産である。

甕 C (44~50)

突出する平底を有し、体部が長胴ないしは球形で口縁部が「く」の字に屈曲するものを甕 C とした。体部外面調整は右上りのタタキである。(50) を除けばすべて小片で全容を知り得るものはない。(44) は復元口径 10.6cm 測る小型品である。体部の形態では長胴の (45~49) と球形の (50) がある。色調はすべて褐色ないしは赤褐色系で、生駒西麓産である。なお (50) については、庄内式期古相に対比されよう。

甕 D (51)

「く」の字に屈曲する口縁端部からさらに上外方に拡張される口縁形態を有する甕である。体部の外面調整は右上がりのタタキである。(51) は復元口径 13.7cm を測る中型品である。生駒西麓産である。

甕 E (52)

体部最大径が中位にある球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く庄内式最古相に比定される庄内式壺である。口縁部は強いヨコナデのため、口縁部外面下半に段状の稜を残している。体部外面は三分割成形に沿った太めのタキの後中位の一部にハケナデ、内面はヘラケズリが行われている。生駒西麓産である。

鉢 (53~61)

(53・54) は楕形を呈する体部に屈曲して斜上方に伸びる口縁部が付く大型鉢である。(54) がほぼ完形で、口径28.3cm、器高11.5cm、底径4.9cm を測る。(53) が褐色系の色調で生駒西麓産。(54) が赤褐色で胎土中に赤色酸化土粒が含まれている。(55) は球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く中型鉢である。生駒西麓産である。(56) は上げ底の底部に逆台形を呈する体部が付く小型鉢である。生駒西麓産である。(57) は上げ底の底部に逆円錐状の体部が付くもので、体部の外面は右上がりのタキ調整が行われている。小型の鉢に分類したが、製塙上器の可能性が高い。生駒西麓産である。(58~61) は台付鉢と推定される。(58) は脚台部下半と口縁部を欠く。全体に器壁面の風化が進んでおり、調整等は不明である。(59) は円錐台形脚台にやや深目の体部が付く台付鉢で脚台部は完存、体部分は1/2が遺存している。(60・61) はともに円錐台形脚台で、ゆるやかなカーブを描く(60) と「ハ」の字状を呈する(61) がある。(60) が在地産、その他は生駒西麓産である。

有孔鉢 (62~64)

逆円錐状の体部を有するもので、底部が水平な(62・63) と突出する(64) がある。(62) はやや難な造りで口縁部は擬口縁を呈する。体部外面の調整はタキである。穿孔の形状は三角形で、焼成前に内面側から穿たれている。(63) は外外面にハケナデ調整がみられる。穿孔は底部中央からやや外側に焼成前に内面側から穿たれている。穿孔の形状は不定形である。(64) は(62) と同様擬口縁を呈する。穿孔は円形で焼成前に内面側から穿たれている。(62・63) が生駒西麓産。(64) が在地産である。

高杯 (65~83)

(65~71) は浅い楕状の杯部から口縁部が外反するもので、脚部は屈曲気味に広がっている。口径が22.5~37.3cm を測る大型の(65~69) と16.7~20.1cm を測る小型の(70~71) がある。(67) が赤褐色で精良な胎土を使用している以外は、生駒西麓産である。(72) は深目の杯部を有する高杯で、口縁端部の拡張が計られているほか、杯体部下半の拡張面に3条の直線文が施されている。(73~80) は高杯の脚部である。(73~78) が大型品、(79~80) が小型品である。(77) の据部外面には刺突文が施されている。小型品の(79~80) は(79) が柳描直線文、(80) が柳描直線文と刺突文が施されている。(80) は赤褐色の色調を呈し、胎土が精良なもので、搬入品と考えられる。他は生駒西麓産である。(81) は中央でゆるやかに開く据部

を有する脚部に、楕形の杯部が付くミニチュアの高杯である。杯部上半および脚部中位に波状文が施文されている。生駒西麓庵である。(82・83)は楕形の杯部を有する高杯である。(82)は全容を知り得るもので、口径15.8cm、器高12.8cm、脚部径14.4cmを測る。(83)は(82)に比して、やや深目の杯部を有するもので、復元口径13.5cm、杯部高7.0cmを測る。(82)が在地岸、(83)が生駒西麓庵である。

器台 (84)

筒形の体部に大きく外反する口縁部が付く中型の器台である。口縁端部は下方に大きく垂下しており、端部に竹管押捺による同心円文をヘラ描き直線で連結した文様を施文しているほか、体部外面に不規則な柳描直線文を4条めぐらせていている。灰白色～淡赤褐色の色調で、胎土には微細な砂粒が極少量含まれる程度の精良な粘土が使用されている。

蓋 (85～88)

蓋は1点陶化した。いずれも1/2以上が遺存するものである。つまみ部の天井部が浅いもの(85)と深いもの(86～88)に区別される。つまみ径3.3～4.0cm、つまみ高1.1～1.4cm、器高4.0～5.1cm、脚部径12.2～15.7cmを測る。(85～88)は角閃石を多量に含み褐色系の色調を呈する生駒西麓庵である。

台石 (89)

両面が平坦な面を有する台石で、幅6.4～12.6cm、厚さ2.5～5.7cm、重さ2.5kgを測る。石材は閃緑岩である。表面の上面は研磨が行われている。

S D - 201

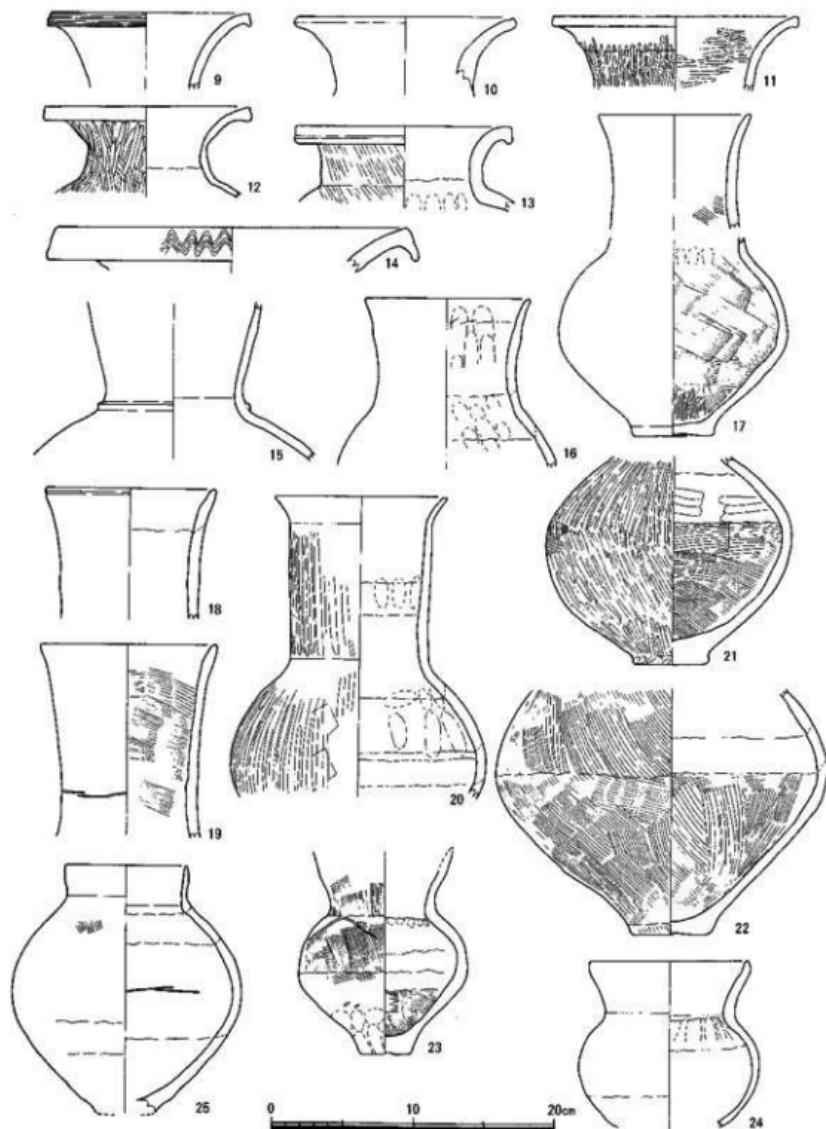
調査区の東部で検出した。北東～南西方向に伸びるもので、調査区内で屈曲した後、溝幅が増大している。検出長9.9m、幅2.3～4.4m、深さ0.31mを測る。埋土は上層から暗灰色極細粒砂・灰色粘質シルトである。遺物は弥生時代後期に比定される壺・甕・高杯等の土器類が少量出土している。

S D - 202

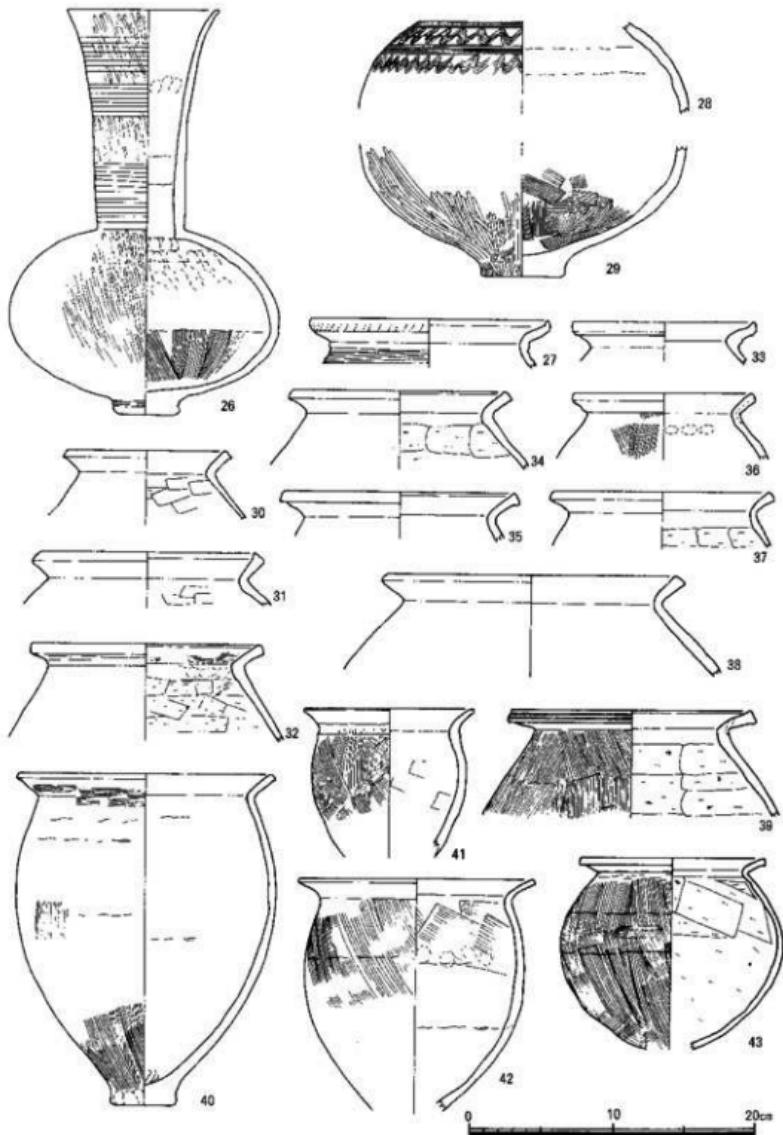
1D～3D区で検出した。北東～南西方向に伸びるもので、南部でS O - 201を切っている。検出長9m、幅0.7～0.8m、深さ0.22mを測る。埋土は上層から暗灰色極細粒砂・灰色粘土である。遺物は弥生時代後期に比定される土器類の小破片が少量出土している。

小穴 (S P)

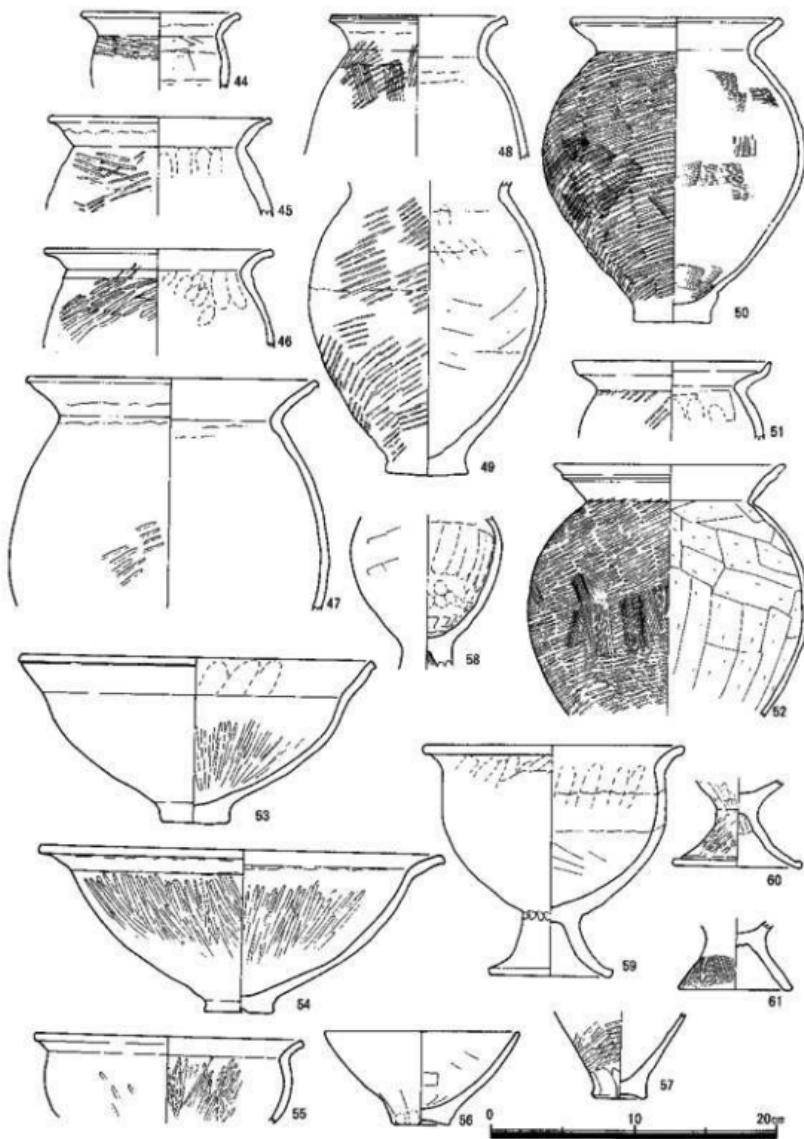
小穴は13個(S P - 201～213)検出した。そのうち、S P - 201～207はS I - 201を構成するものである。S P - 208～213はS O - 201の西側部分で検出されており、柵列等を構成した小穴と推定される。



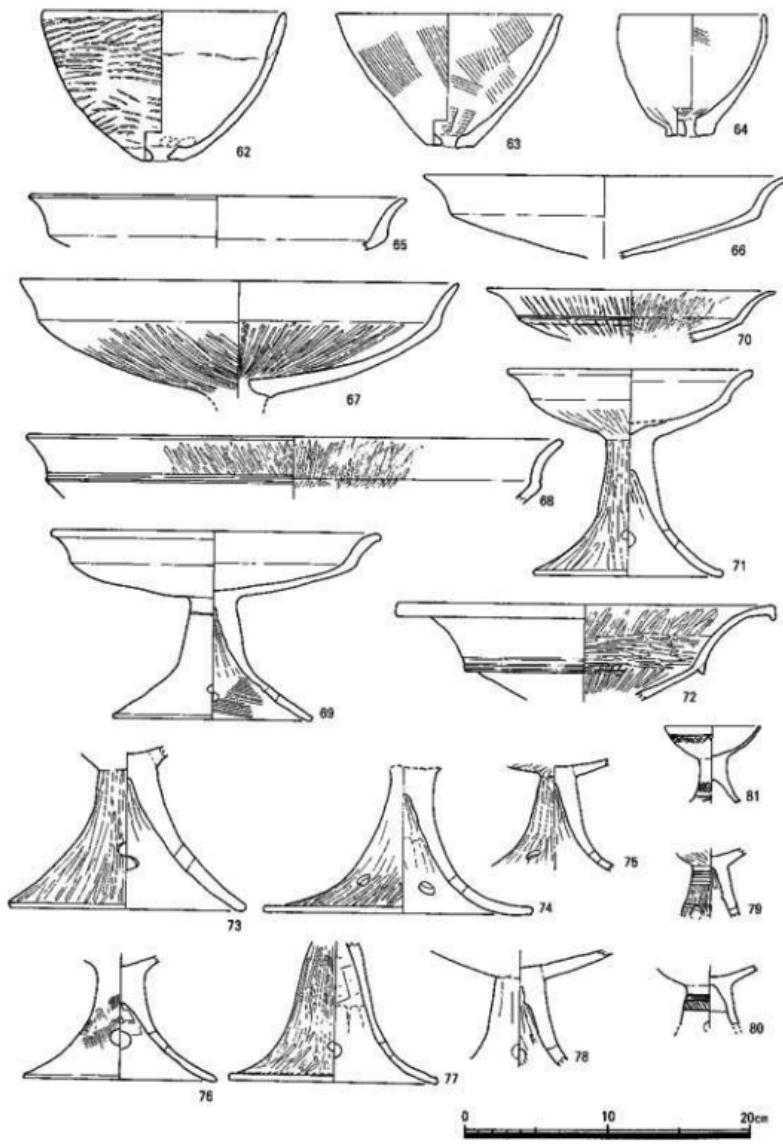
第9図 SO-201出土遺物実測図-1



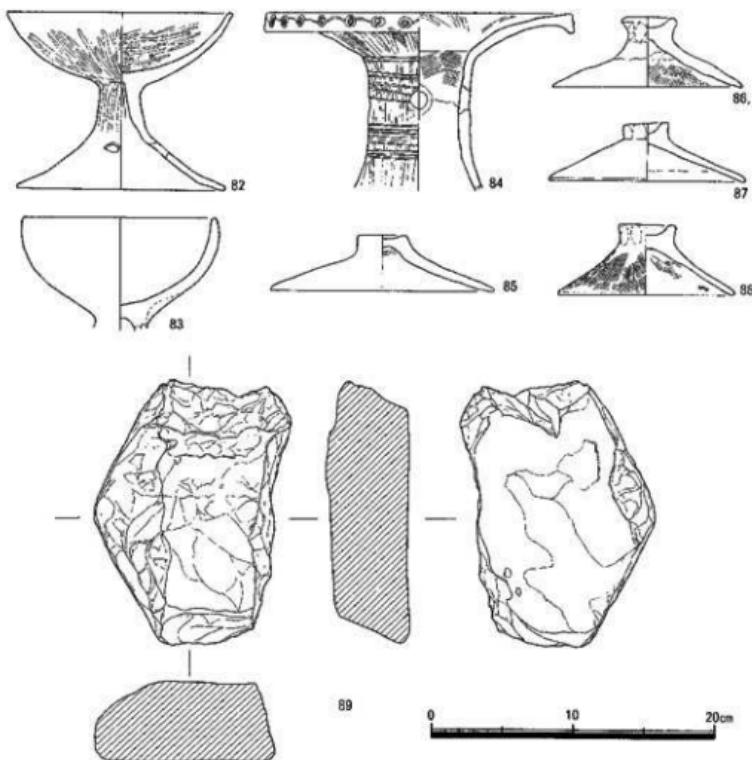
第10図 SO-201出土遺物実測図-2



第11図 SO-201出土遺物実測図-3



第12図 SO-201出土遺物実測図-4



第13図 SO-201出土遺物実測図-5

2) 第7層上面検出遺構(第1調査面)

土坑(SK)

SK-101

調査区の南西隅で検出した。南部および西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.8m、南北幅0.7m、深さ0.7mを測る。埋土は暗灰色粘土である。遺物は出土していない。

溝(SD)

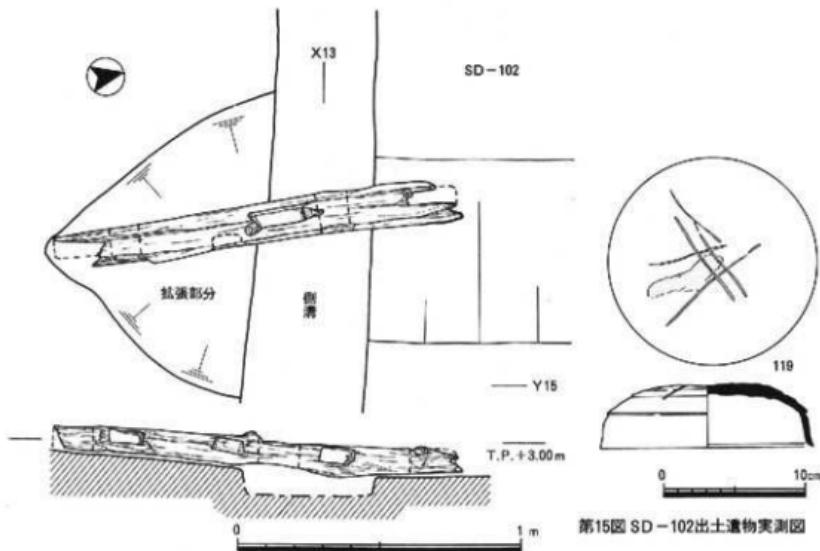
SD-101

1D～3D区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長6.5m、幅0.4～0.6m、深さ0.13

mを測る。埋土は明青灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

SD-102

1C～3C区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長9m、幅2.0m～2.3m、深さ0.8mを測る。埋土は上層から明オリーブ灰色極細粒砂・青灰色粘質シルト・灰白色粘質シルト・褐灰色粘質土・暗緑灰色粘質土である。遺物は古墳時代後期初頭の須恵器杯蓋1点(119)・壺1点のはか建築部材が1点出土している。(119)は口縁部の一部を欠損する以外は完存している。口径15.0cm、器高4.4cm、稜径13.7cmを測る。上面が平らな天井部から斜下方へ直線的に伸びて稜に至るもので、口縁部は下外方に下り平らで内傾して終る端部を有する。天井部にヘラ描き直線文を組み合わせたヘラ記号と赤色顔料による朱記号がある。建築部材はSD-102の南部から調査外に伸びるもので、両端は欠損している。検出部分で1.45mを測る。おおむね、溝東肩部分の青灰色粘質シルト層中に埋没している。断面の形状は、一辺が13cmと10cm幅を測る方形で、上面を向いた方がやや幅広である。上面に5×18cmを測る貫通する枘穴3箇所と側面に5×12cmを測る貫通する枘穴2箇所と5×10cmの貫通しない枘穴が1箇所穿たれている。



第14図 SD-102出土建築部材平面図

S D - 103

S D - 102の西側で検出した。北西-南西に伸びるもので、検出長7.2m、幅1~1.4m、深さ0.14mを測る。埋土は明緑灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。

S D - 104

調査区の西端で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分では屈曲して南北方向に伸びるもので、南東端はSK-101に切られている。検出長9m、幅0.7~3.5m、深さ0.32mを測る。埋土は上層から灰白色極細粒砂・灰白色細粒砂・中粒砂・明緑灰色粘質シルト・綠灰色極細粒砂・灰白色中粒砂である。遺物は出土していない。

小穴 (SP)**SP - 101**

1B1Kで検出した。上面の形状が円形を呈するもので、径0.5m、深さ0.16mを測る。埋土は灰白色極細粒砂・灰色極細粒砂・明緑灰色極細粒砂・灰色粘質土である。遺物は出土していない。

3) 第7層出土遺物

第7層からは弥生時代後期後半の資料が出土している。図化したものは29点(90~118)で、その内訳は上器類が28点(90~117)、銅鏡が1点(118)である。

広口壺(90~96)

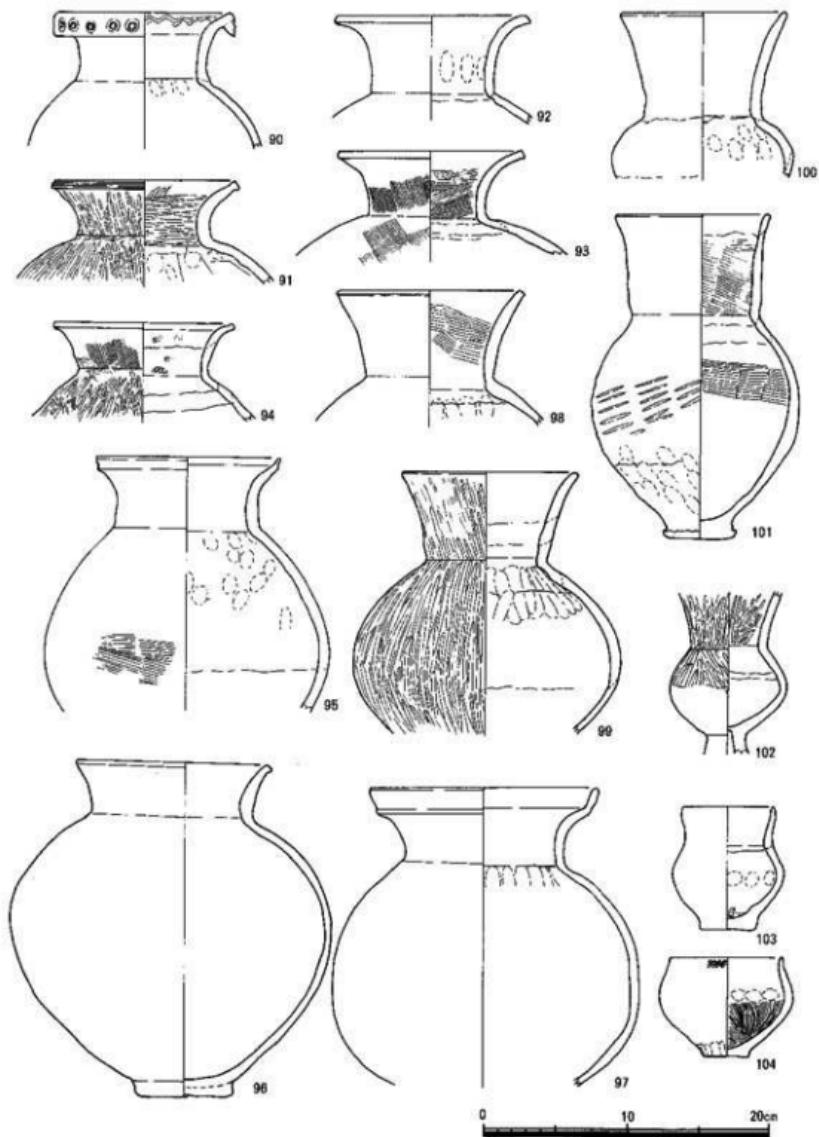
全容を知り得るものは(96)のみで、他は体部中位から口縁部にかけての資料である。形態的には口縁端部が垂下するもの(90)、頸部が短く伸びた後外反するもの(91)、(91)に比して頸部が長く口縁部が大きく外反するもの(92・93)、頸部が直上方に伸びた後、口縁部付近で小さく屈曲するもの(94)、直上に伸びた頸部からLI縁部が外反し、端部が斜上方に小さくつまみ上げられるもの(95)、口縁部がゆるやかに外反するもの(96)に区別される。(90)は重下する口縁端部に竹管文、LI縁部内面に波状文が施文されている。(91)は口縁端面に擬凹線が2条廻る。各部の数値は(90~95)が口径11.9~13.2cm、頸部高2.9~5.0cm。(96)が口径13.5cm、器高24.0cm、底径6.6cmを測る。色調では褐色~黒褐色の(90~92・94~96)と/orい黄褐色の(93)があり、前者が生駒西麓産で、後者は搬入品と推定される。

複合口縁壺(97)

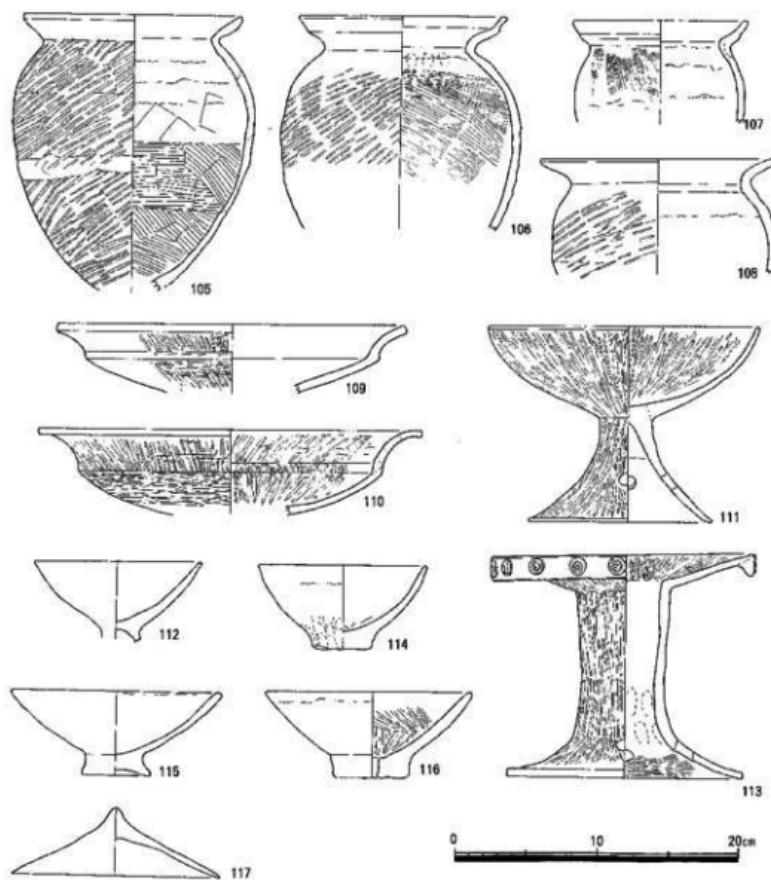
外反して開く頸部上位から、粘土帶を上方に追加して二重口縁を形成する複合口縁壺である。全体に風化を受けており、調整は不明瞭である。褐色系の色調を呈する。生駒西麓産である。

長頸壺(98~101)

長頸壺は球形の体部に外反気味に口頸部が伸びる(98・99)とやや縱長の球形を呈する体部から、口頸部が直上ないしは外傾して伸びる(100・101)がある。いずれも生駒西麓産である。



第16図 第7層出土遺物実測図－1



第17図 第7層出土遺物実測図－2

台付壺（102）

脚台部と口縁部を欠損している。中空の脚台部に小型の長頸壺が付くもので、残存高としては11.5cmを測るが、本来は15cm前後の器高を有したものと推定される。色調はにぶい黄橙色で、胎土には精良な粘土が使用されており、焼成も良好である。

小型短頸壺（103）

全体の1/2が遺存している。外面調整は風化のため不明である。赤褐色の色調で胎上中に大

粒の長石と小粒の角閃石・赤色酸化土粒が含まれている。

無頸壺 (104)

全体の1/2が遺存している。体部最大径を持つ体部中位から内傾した後、口縁部付近で角度を直上方に変えるもので、端部は丸味を持って終っている。生駒西麓産である。

壺 (105~108)

口縁部の形態の違いから、口縁端部が丸味を帯びて終るもの (105・108) と、口縁部が二段に屈曲する (106・107) がある。後者は河内地域の弥生後期土器編年の中で弥生後期後半に比定される上六万寺遺跡2・3トレンチの土器群と共通している。4点ともに生駒西麓産である。

高杯 (109~112)

4点図化した。口縁部が大きく外反して開く (109・110) と碗形の杯部を有する (111・112) がある。(109・110) はともに口縁部の1/10程度が遺存している。(109) が在地産、(110) が生駒西麓産である。碗形の杯部を有する (111・112) は、大型品の (111) と小型品の (112) がある。2点とも生駒西麓産である。

器台 (113)

一部欠損するがほぼ全容を知り得る資料である。ゆるやかに屈曲して開く裾部から直上に伸びる筒状の体部が付くもので、口縁部は屈折して直線的に伸びた後垂下して幅広の端面を有する。口縁端面には円形浮文が貼付けられている。全体に成形・調整が丁寧で胎土においても精良な粘土が使用されている。色調はにぶい黄橙色である。在地産と推定される。

鉢 (114・115)

ともに小型の鉢で1/2程度が遺存している。(114) が平底、(115) が上げ底である。2点ともに生駒西麓産である。

有孔鉢 (116)

突出する底部を有する有孔鉢である。口径14.7cm、器高6.1cm、底径5.2cmを測る。穿孔1~1.6cmを測るもので焼成前に内側から穿たれている。生駒西麓産である。

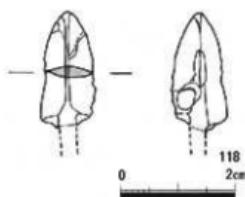
蓋 (117)

全体の1/2が遺存している。円錐状の頂点部分に乳頭状のつまみが付く。口径14.7cm、器高4.8cmを測る。

銅鏡 (118)

茎部を欠損しており、遺存部分で鏡身長2.1cm、鏡身幅0.9cmを測る。有茎鏡で逆刺を持たない凸基式に分類される。

横断面はレンズ状で鏡の縫は不明瞭である。出土地点は2E区の7層である。



第18図 第7層出土銅鏡実測図

第4節 出土遺物観察表

・凡例 種別-L 1m以上 M 0.5~1m火薬 S 0.5m未満 第 ◎多世 ○多い △少ない ▲種類 ◉赤一赤色化粧 ■一片端部有

造物名	固有名	法量(cm)	調査・手法	色調	種					焼成 保存	堆存	出土位置 説明		
					外面	内面	土							
							新石器	石器	母貝	イシト				
		(14.7)	外面: 口縁部ヨコナヂ。体部 - ナヂ。 - 内面: 口縁部ヨコナヂ。	褐色灰白色	◎	△	○	△	○	△	良好	1/3	SK-201 画面に赤色 隕石	
1	六 弥生土器 広口瓶	(13.9)	外面: 口縁部ヨコナヂ。体部 - ナヂ。 - 内面: 口縁部ヨコナヂ。体部 ヘラケグリ。	褐色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	1/12 スズ村岩	
3	六 弥生土器 長颈甌	10.3	外面: 口縁部ヘラキタキ。 - 内面: 口縁部折イナデ。	褐灰色 やや暗	◎	○	△	○	△	○	▲	△	SK-202 スズ付堀	
4	六 弥生土器 壺	5.1	外面: 体部下平ハナナヂ。後 付ナヂ。 内面: 体部ナヂ、下半ヘラケ グリ。	褐色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	圓形 窓前 SK-201	
5	六 弥生土器 高杯	-	外面: 遷部ヘラキタキ。丁度 竹管文を二段に施す。 内面: 頭部ナヂナダ。	褐灰色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	1/4	
		13.4	外縁 (25.4)											
7	六 弥生土器 広口瓶	(13.3)	外面: 口縁部ヨコナヂ。頸部 - ハナナヂ。 - 内面: 口縁部ナヂ。	褐色灰白色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	1/4 SK-206	
8	六 弥生土器 山口壺	5.6	外面: 体部ナヂ。洗刷削正後 付ナヂ。 内面: 体部ナヂ。	褐色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	底部 窓前	
9	六 弥生土器 広口瓶	13.7	外面: 口縁部凹線文。頸部ナ - ダ。 - 内面: 口縁部折イナデ。	褐褐色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	3/4 SO-201	
10	六 弥生土器 広口壺	(15.0)	外面: 口縁部ヨコナヂ。 - 内面: 口縁部ヨコナヂ。	褐色灰白色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	1/6	
11	六 弥生土器 広口壺	17.2	外面: 口縁部ヨコナヂ。頸部 ヘラキタキ。 内面: 口縁部ヨコナヂ。頸部 ヘラキタキ。	灰白色 やや暗	○	△	○	△	○	△	○	△	白壁部 窓前	
12	六 弥生土器 広口瓶	(14.5)	外面: 口縁部ヨコナヂ。頸部 ヘラキタキ。 内面: 口縁部ヨコナヂ。	灰白色 やや暗	△	○	△	○	△	△	△	△	口縁部 窓前 1/4	
13	六 弥生土器 広口壺	15.0	外面: 口縁部ヨコナヂ。頸部 から心咲ハナナヂ。 内面: 口縁部ヨコナヂ。体部 横ナヂ。	褐茶褐色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	口縫部 窓前	
14	六 弥生土器 長颈甌	(24.4)	外面: 口縁部ヨコナヂの後波 状文。体部ナヂ。 内面: 口縁部ヨコナヂ。	小褐色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	1/12	
15	六 弥生土器 広口 長颈甌	-	外面: 口縁部がより凹部ナヂ。 - 頸部と体部の縁に點打付穴開。 内面: 口縁部ヨコナヂ。	赤茶褐色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	1/2	
16	六 弥生土器 長颈甌	頸部径 9.4	(11.6) - -	外面: 口縁部ヨコナヂ、以下 或部までナヂ。 内面: 口縁部形成後ナヂ。	褐黃褐色 やや暗	○	△	○	△	○	△	△	△	1/2

通 路 名 称	固 定 形 式	器 種	通 量 (cm)	測 定 手 法		色 調	地 質	土 質	保 水 能 力	成 長 性	存 在 率	山 土 位 置 考 査
				外 面	内 面							
17.	原生土型 長距離	10.4 3.7	外面：表面試化の為調整不明 内面：口端部下以下ハケナ ダ。	灰白色 やや粗	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	▲ S L	赤 化 度 改 善 化	1/2	SO-201
18.	原生土型 長距離	(11.6)	外面：口端部1名の凹陥、以 下ハケナ ダ。 内面：口端部ハケナ ダ。	灰黃褐色 やや粗	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/4	-
19.	原生土型 長距離	12.1 - -	外面：硬而風化の為調整不明 内面：口端部ハケナ ダ。	灰黃褐色 やや粗	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	頗 化 3/4	ヘラジカ皮
20.	原生土型 長距離	11.9 - 体部最大径 17.8	外面：口端部ヨコナ。難 化試化へリゴナ。 内面：口端部ヨコナ。以 下ハケナ ダ。	哈赤褐色 やや粗	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/2	ヌス付着
21.	原生土型 長距離	- 5.4 17.2	外面：灰褐色ハラミヤキ。一部 ハナダ。 内面：体部上半ハラナ以下 ハケナ ダ。	灰黃褐色 やや粗	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/2	-
22.	原生土型 短距离	3.4 39.0	外面：津波ハケナ ダ。 内面：体部上半ハケナ。以下ハ ケナ ダ。	暗赤褐色 やや粗	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/2	ヌス付着
23.	原生土型 短距离	- 3.6 体部最大径 11.9	外面：難化下部上半ハケ ナ。茎葉捲曲正常。 内面：体部下半ハケナ。難 化から体部中段ハケナ ダ。	茎褐色 白 △ S L	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	はぼ 完形	ヘラ記号
24.	原生土型 短距离	(10.9) - 体部最大径 12.6	外面：口端部ヨコナ。以 下ハ ナ ダ。 内面：口端部ヨコナ。体部 上半接觸部以下ハケナ ダ。	暗赤褐色 やや粗	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/2	-
25.	原生土型 短距离	8.4 -	外面：難化の為調整不明顯。 内面：白鍼部ヨコナ。以下ハ ナ ダ。	明赤褐色 粗	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/2	ヌス付着
26.	原生土型 短距离	10.4 39.0 4.5 体部最大径 18.3	外面：口端部および底部難化直 近。底葉も餘る上面にハナ ダ。 内面：体部下半ハケナ ダ。大 葉上半部ハケナ ダ。	暗赤褐色 赤褐色 灰黃褐色 黃褐色	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	良好	難化 完形
27.	原生土型 小中点	(16.8) - 5.6	外面：口端部刺突。体部上 位に油綠色。 内面：口端部ハケナ ダ。体部 ナ ダ。	褐色 灰黃褐色	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/8	-
28.	原生土型 短	-	外面：体部上位に横筋直線文 と波状文。 内面：体部ナ ダ。	淡黃褐色 粗	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/4	-
29.	原生土型 短	- 5.6	外面：体部後ヘタガキ。 内面：口端部ハケナ ダ。体部 ナ ダ。	灰黃褐色 やや粗	○ S L	△ S L	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/4	-
30.	原生土型 齊A	(11.0) - 5.4	外面：口端部ヨコナ。体部 ナ ダ。 内面：口端部ヨコナ。体部 ヘラナ ダ。	褐灰黑色 やや粗	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/3	-
31.	原生土型 要A	(14.8) - ナ ダ。	外面：口端部ヨコナ。体部 ナ ダ。 内面：口端部ヨコナ。体部 ヘラナ ダ。	灰黃褐色 やや粗	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/8	ヌス付着
32.	原生土型 要A	(15.5) - ナ ダ。	外面：口端部ヨコナ。体部 ナ ダ。 内面：口端部ハケナ。体部 ヘケズリ。	淡黃褐色 やや粗	○ S L	△ S L	△ S L	△ S L	△ S L	△ S L	1/3	ヌス付着

III 蒸気過熱第13次調査会(KF92-13)

・凡例 变遷 L: 1m以上 M: 0.5~1m未溝 S: 0.5m未溝 量: ○多い △少ない ▲稀少 増加: 過去酸化土 增: 新規付着

地質番号	測定点名	測定点 (m)	変遷・季節		色調		地		土		成育率	上位実験
			外側 内側	外側 内側	赤 黄 白 青 黒	石 英 長 輝 透 矽 岩 等	右 左 高 低 斜 面	高 低 斜 面	その他の組			
33	牛生土壌 表A	(12.6)	外側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	茶褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	良好 ■	1/8	KO 281 スス付着
34	牛生土壌 表A	(14.7)	外側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	明茶褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/4	スス付着
35	牛生土壌 表A	(16.2)	外側: 1級葉ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	暗褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/8	■
36	牛生土壌 表A	(12.4)	外側: 1級葉ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	灰黃褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/4	スス付着
37	牛生土壌 表A	(15.0)	外側: 1級葉ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	暗灰黃褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/6	■
38	牛生土壌 表A	(20.2)	外側: 1級葉ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	茶褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/4	■
39	牛生土壌 表A	(16.8)	外側: 1級葉ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	茶褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/4	スス付着
40	牛生土壌 表B	17.5 23.7 4.6 体系改良 18.	外側: 風化の為調査不明顯。 一部ハケナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	赤褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/2	スス付着
41	牛生土壌 表B	(11.9)	外側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 1級葉ヨコナギ。体部 ナギ。	暗褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/2	スス付着
42	牛生土壌 表B	16.5	外側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	暗褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/2	スス付着
43	牛生土壌 表B	12.8	外側: 1級葉ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	暗灰黃褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/2	スス付着
44	牛生土壌 表C	(10.6)	外側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 1級葉ヨコナギ。体部 ナギ。	暗褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/2	スス付着
45	牛生土壌 表C	(15.4)	外側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	暗褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/4	■
46	牛生土壌 表C	(15.8)	外側: 1級葉ヨコナギ。体部 ナギ。 内側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギ。	暗褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/2	スス付着
47	牛生土壌 表C	20.0	外側: 風化の為調査不明顯。 一部タキ。 内側: 口縫部ヨコナギ。他は ナギ。	赤褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/2	スス付着
48	牛生土壌 表C	(12.1)	外側: 口縫部ヨコナギ。体部 ナギタキ。 内側: 口縫部ヨコナギ。以下 ナギ。	暗褐色 ■	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	▲ △ ○ S L	■	1/4	■

通水年月	樹種	法面傾斜度(°) 代表傾斜度(%)	調査・手法	外観 内観	外観 内観	石質 岩質 角閃石 雲母 サテライト 其他	石 岩 角 閃 石 雲 母 サ テ ラ イ ト 其 他	成 長 度 cm 未開発	生存率 %	進歩率 %	出土量 kg
外表面 内表面	外表面 内表面	外表面 内表面	外表面 内表面	外表面 内表面	外表面 内表面	外表面 内表面	外表面 内表面	外表面 内表面	外表面 内表面	外表面 内表面	外表面 内表面
46	ガモウシキ モクシ	— 5.9 分根最大径 16.6	外表面:体部タクタ。内面:体部上半部タクタ。以下ハッケツリ。	暗茶褐色 —	やや粗 サテライト	○ △ S L	○ ○ S L	— ▲ L	良好 1/2	休止 S0-201	—
50	弥生土器 モクシ	14.2 21.8 5.4 分根最大径 18.3	外表面:口縁部ヨコナテ。体部タクタの後一部ハゲナヂ。内面:口縁部ヨコナテ。体部ハゲナヂ。	灰茶褐色 —	粗 サテライト	○ △ S L	○ ○ S L	— ▲ L	— 1/2	— ×X付着	—
51	ガモウシキ モクシ	(13.7)	外表面:口縁部ヨコナテ。体部タクタ。 内面:口縁部ヨコナテ。体部ハゲナヂ。	赤褐色 —	粗 サテライト	○ △ S L	○ ○ S L	▲ M	— —	— 1/6	—
52	八 土師器 モクシ	16.0	外表面:口縁部ヨコナテ。体部タクタの後一部ハゲナヂ。 内面:口縁部ヨコナテ。体部ハゲナヂ。	灰茶褐色 —	粗 サテライト	○ △ S L	○ ○ S L	— —	— 1/2	— ×X付着	—
63	八 ガモウシキ モクシ	26.6 11.7 4.6	外表面:口縁部ヨコナテ。体部 都ナヂ。 内面:口縁部ヨコナテ。体部 ヘラミガキ。	灰茶褐色 —	やや粗 サテライト	○ △ S L	○ ○ S L	— —	— 1/3	— —	—
54	八 弥生土器 モクシ	25.3 11.5 4.9	外表面:口縁部ヨコナテ。体部 ヘラミガキ。 内面:口縁部ヨコナテ。体部 ヘラミガキ。	赤褐色 —	粗 サテライト	○ △ S L	○ ○ S L	— —	— 1/4	— —	— スス付着
55	弥生土器 モクシ	(18.0)	外表面:口縁部ヨコナテ。体部 一部ヘラミガキ。 内面:口縁部ヨコナテ。体部 ヘラミガキ。	灰茶褐色 —	やや粗 サテライト	○ △ S L	○ ○ S L	— —	— 1/4	— —	— —
56	九 ガモウシキ モクシ	13.7 6.7 4.1	外表面:伝記ナデ。底尾側面 ナデ。 内面:体部ナデ、都ヘラタ クタ。	暗茶褐色 暗茶褐色 —	粗 サテライト	△ S L	○ ○ S L	— —	— 2/3	— —	— 内面スス付着
57	弥生土器 モクシ	— 3.8	外表面:凹凸タクタ。底尾側面 ナデ。 内面:体部ナデ。	暗茶褐色 —	粗 サテライト	△ L	— —	○ M	— —	— 1/2	— —
58	九 ガモウシキ モクシ	— — 10.6	外表面:縫隙および台階調整不 規則。 内面:体部ナデ。	赤褐色 —	粗 サテライト	○ △ S L	○ ○ S L	— —	— 1/2	— —	— スス付着
59	九 ガモウシキ モクシ	17.8 16.4 8.3	外表面:口縁部および台階調整 ナデ。 内面:都部ナテナタ、都ナタ。 脚部ナデ。	赤褐色 —	やや粗 サテライト	○ △ S L	○ ○ S L	— ▲ L	良好 1/2	休止 — —	— スス付着
60	九 弥生土器 モクシ	— — 9.0	外表面:都部ヘラミガキ。 内面:ハケナヂ。底部シボリ 凹。	暗灰白色 —	やや粗 サテライト	○ △ S L	— —	▲ M	— 1/2	— —	— —
61	九 ガモウシキ モクシ	— — 8.0	外表面:底部ヘラミガキ。 内面:体部および台階ナテ。	暗茶褐色 —	やや粗 サテライト	○ △ S L	○ ○ S L	— —	— —	台部 完存	— スス付着
62	九 ガモウシキ モクシ	17.0 16.6 —	外表面:体部タクタ。 内面:体部ナデ。	暗茶褐色 —	やや粗 サテライト	△ S L	— —	○ M	— —	— 1/2	— —
63	九 ガモウシキ モクシ	13.7 9.6 3.5	外表面:体部ハケナヂ。 内面:体部ハケナヂ。	暗灰褐色 —	粗 サテライト	○ △ S L	— —	○ S	— —	— 1/2	— —
64	九 弥生土器 モクシ	10.1 9.7 3.4	外表面:底部の鳥糞斑不規則。 内面:—	赤褐色 —	やや粗 サテライト	○ △ S L	— —	▲ M	— —	進化 1/2	— —

III 芽振速第13次調査(KCF92-13)

調査番号 CMB番号	樹種 科名	法量(cm) LH 生長量 枝葉量 (+) 墓元量	高麗・手唐色		試驗土 名	根 石 英 鉄 硫 酸 合 成 物 の 性 質	その他の 性質	堆積 状態	著 意 事 件	出土位置 考
			外側 表面	内側 裏面						
55	新生土器 高杯	(26.2)	外側:杯部ヨコナガ。 - 内面:杯底ヨコナガ。	暗黃褐色 "	やや粗	◎ S L △ S L ○ S L ▲ M L	○ S L △ S L ○ S L ▲ M L	良好	山腹部 1/12	S O 201
66	新生土器 高杯	(35.2)	外側:杯部ヨコナガ。杯底部 ナガ。 - 内面:杯底ナガ。	赤褐色 "	粗	○ S L △ S L ○ S L ▲ M L	△ S L ○ S L ○ S L ○ S L	"	"	スヌ村番
67	新生土器 高杯	(31.0)	外側:杯部ヨコナガ。 - 斧部:杯底ヨコナガ。 - 内面:杯底ヨコナガ。杯底部 ヘラミガキ。	淡褐色 "	滑	▲ M L	"	水	山腹 1/2	"
68	新生土器 高杯	(37.6)	外側:杯部ヘラミガキ。 - 内面:杯底ヘラミガキ。	灰黄色 ににおいて青色	粗好	△ S L ▲ M L △ S L	△ S L ○ S L △ S L	"	山腹部 1/6	スヌ村番
69	新生土器 高杯	22.5 13.4 13.5	外側:黒化の為調整不規則。 内面:	淡褐色 褐色	粗	○ S L △ S L ○ S L ○ S L	○ S L △ M L ○ S L △ M L	不良 黒化	1/2	スヌ村番 スカシ孔付
70	新生土器 高杯	(29.0)	外側:杯部ヘラミガキ。 - 内面:杯底ヘラミガキ。	ににおいて青色	粗好	○ S L △ M L ○ S L △ S L	○ S L △ M L ○ S L △ S L	良好	山腹部 1/2	"
71	新生土器 高杯	10.6 14.8 13.1	外側:口縁部ヨコナガ。杯底 部以降トライガキ。 内面:杯底ナガ。脚部シボリ 目。	暗黃褐色 "	粗好	○ S L △ S L ○ S L △ S L	○ S L △ M L ○ S L △ M L	"	1/3	内層スヌ村番 スカシ孔付
72	新生土器 高杯	(26.2)	外側:黒化の為調整不明顯。 内面:杯底ヘラミガキ。	ににおいて青色	やや粗	○ S L △ S L ○ S L △ S L	○ S L △ M L ○ S L △ M L	"	杯部 1/2	表面文
73	新生土器 高杯	-	外側:脚部ヘラミガキ。 - 内面:脚部シボリ目。以下ナ ダ。	ににおいて青色	やや粗	○ S L △ S L ○ S L △ S L	○ S L △ S L ○ S L △ S L	"	脚部 1/2	スカシ孔付
74	新生土器 高杯	18.9	- 外側:脚部ヘラミガキ。 - 内面:脚部シボリ目。以下ナ ダ。	ににおいて青色	やや粗	○ S L △ S L ○ S L △ S L	△ S L ○ M L ○ M L △ M L	脚部 充存	"	スカシ孔付
75	新生土器 高杯	-	外側:脚部ヘラミガキ。 内面:脚部シボリ目。以下ナ ダ。	淡褐色	やや粗	○ S L △ S L ○ S L △ S L	△ S L ○ M L ○ M L △ M L	良好 特状部 充存	"	スカシ孔付
76	新生土器 高杯	13.5	外側:脚部ハケナダ。 内面:脚部ヘラナダ。以下ナ ダ。	暗灰黄色	やや粗	○ S L △ S L ○ S L △ S L	○ S L ○ M L ○ M L △ M L	"	脚部 1/2	スカシ孔付
77	新生土器 高杯	14.5	- 外側:脚部ハケナダ。脚部に 剥離文。 - 内面:脚部ハケズリ以下ナ ダ。	暗灰褐色	粗好	○ M L △ M L ○ M L △ M L	○ M L ○ M L ○ M L △ M L	脚部 1/2	"	スカシ孔付
78	新生土器 高杯	-	外側:杯部および脚部ヘラ ナダ。 内面:脚部シボリ目以下ナ ダ。	ににおいて青色	やや粗	○ S L △ S L ○ S L △ S L	○ M L ○ M L ○ M L △ M L	"	脚部 1/2	スカシ孔付
79	新生土器 高杯	-	外側:脚部ヘラミガキ。脚部 黒化文。 内面:脚部シボリ目以下ナ ダ。	明黄褐色 "	やや粗	○ S L △ S L ○ S L △ S L	○ S L ○ M L ○ M L △ M L	"	脚部 1/2	スカシ孔付
80	新生土器 高杯	-	外側:脚部輪輪直線文。 - 内面:脚部ナガ。	淡褐色 "	精良	△ S L	"	脚部 1/2	"	剥離文

・凡て 斜線 - L 未記上 M 0.5~1m未満 S 0.5m未満 ■ 多量 ○多い △少い ▲稀少 □赤一色無化上 □ 結晶片有

遺跡名	区分	法量(cm) 基標 基盤 基層 元底	高さ・手法		色調					鉱物		土		成 育 序 列 その他の特徴	出土箇所 場所		
			外縁 内縁	外面 内面	赤	黄	石	白	青	黒	褐色	茶	茶	土			
81 ○	弥生土器 高台 小窓	6.6 —	外縁: 杯形ココナツ。杯体 輪波状文、班部中位波状文。 内縁: 杯部および縁部ナガ。	暗灰黄色 —	やや粗 —	△ △S △L	△ △M △L	▲ △S △L	△ △M △L	▲ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	▲ △M △L	良野 1/2	S O - 201	
82 ○	弥生土器 高台 櫛目模	16.6 12.8 11.1	外縁: 杯形ココナツ。杯体 輪波状文、班部中位波状文。 内縁: 杯部ナガ。	白灰黄色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	▲ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	— スカシ乱立	
83 ○	弥生土器 高台 高杯	13.3 —	外縁: 杯形ナガ。 内縁: 杯形ナガ。	暗灰黄色 —	やや粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	新都 1/2	— スカシ乱立	
84 ○	弥生土器 高台	27.3 — —	外縁: 1)縁部表面S字状文、体 部ナガナカの先端部波状文。 内縁: 口縁部ナガナカ。体 部ナガナカ。	灰白色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	1/2	スカン乱立
85 ○	弥生土器 高台 井	15.7 4.0 —	外縁: 濃化の為調整不明瞭。 内縁: —	灰白色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	濃化 1/2	スス付着	
86 ○	弥生土器 高台 つまみ縁	13.2 3.0 —	外縁: つまみ縁部ナガ。体部 ナガ。 内縁: 体部ナガナカ。	灰黃褐色 —	やや粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	良野 1/2	— スス付着	
87 ○	弥生土器 高台 つまみ縁	13.6 4.2 —	外縁: つまみ縁部ナガ。体部 ナガ。 内縁: 体部ナガナカ。	灰黃褐色 —	やや粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	— スス付着		
88 ○	弥生土器 高台 井	12.1 5.1 —	外縁: つまみ縁部ナガ。体部 ナガナカ。 内縁: 体部ナガナカ。	明茶褐色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	— 1/2	— スス付着	
89 ○	弥生土器 広口縫	12.0 —	外縁: 口縁初期竹节文、縫部 おぶひ等ナガ。 内縁: 口縁部波状文。縫部以 下ナガ。	灰黃褐色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	— 1/2	第7番	
90 ○	弥生土器 広口縫	12.7 —	外縁: 1)縁部S字の向縁文。 縫部以下ヘリミナガ。 内縁: 縫部ナガナカ。体部 ナガナカ。	褐色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	— 1/2	— スス付着	
91 ○	弥生土器 広口縫	13.2 —	外縁: 濃化の為調整不明瞭。 内縁: —	明茶褐色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	— 1/2	— スス付着	
92 ○	弥生土器 広口縫	12.7 —	外縁: 濃化の為調整不明瞭。 内縁: —	明茶褐色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	口縁部 3/4	— スス付着	
93 —	弥生土器 広口縫	12.7 —	外縁: 口縁部ココナツ。縫部 以トハケナナ。 内縁: 二等部ココナツ。縫部 ハケナナ。体部ナガ。	灰茶褐色 —	やや粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	口縁部 完存	— スス付着	
94 —	弥生土器 広口縫	12.4 —	外縁: 口縁部ココナツ。縫部 ナガナカ。	乳褐色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	— 1/4	— スス付着	
95 —	弥生土器 広口縫	12.8 —	外縁: 濃化の為調整不明瞭。 内縁: 二等部ココナツ。縫部 ナガナカ。	灰茶褐色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	— 1/2	スス付着	
96 —	弥生土器 広口縫	13.3 —	外縁: 濃化の為調整不明瞭。 内縁: 二等部ココナツ。縫部 ナガナカ。	灰茶褐色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	— 1/2	スス付着	
97 —	弥生土器 広口縫	13.5 24.0 8.6 —	外縁: 濃化の為調整不明瞭。 内縁: —	被色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	— 被色 — スス付着		
—	弥生土器 広口縫	22.4 —	外縁: 濃化の為調整不明瞭。 内縁: —	被色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	被色 — スス付着		
—	弥生土器 広口縫	15.7 —	外縁: 濃化の為調整不明瞭。 内縁: —	被色 —	粗 —	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	△ △M △L	△ △S △L	被色 — スス付着		

III 豊橋進跡第13次調査(KP92-13)

測定箇所	測柱	法則(cm) 口縫部 透水性 吸水性	調査・手法		色調	土					構成 保存	透 通 率	出土位置 備考
			外面	内面		表面	質	高さ	透水性	吸水性			
98	高山上段 長斜面	(13.9) 外側 以下ナメ。 内面:口縫部ハケナメ。体部 上半部頭上部。	外面 内面	表面 質	褐色 やや暗 褐色	○ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	良好	透水率 3/4	第7層
99	一 再生土層 長斜面	(11.9) 外側:口縫部および体部ヘラ ミガキ。 内面:口縫部ナメ。体部上半 部頭上部。	褐色 一帯赤褐色 やや暗 褐色	○ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
100	二 再生土層 長斜面	(11.4) 外側:褐色の為透水不適。 内面:口縫部ナメ。体部指頭 上部。	褐色 内面:口縫部ナメ。体部指頭 上部。	表面 質	褐色 △ S M	△ S M							
101	一 再生土層 長斜面	50.7 23.2 5.0 体部最大径 14.3	外側:口縫部透水の為透水不 適。頭部ヘラミガキ。 内面:口縫部と体部上半 部ナメ。体部カタ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
102	一 再生土層 付付透	外側:頭部等ナメ。体部上半 部ナメ。体部中以下ナメ。 内面:底端ヘラミガキ。体部 ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
103	三 再生土層 小斜面 短斜面	6.3 8.7 4.0 体部最大径 7.9	外側:褐色の為透水不 明瞭。 内面:口縫部コロナメ。体部 ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
104	二 再生土層 無痕面	8.6 7.0 3.1 体部最大径 9.5	外側:口縫部透水状況。体部ナ メ。底端部面行ナメ。 内面:口縫部コロナメ。体部 ナメ。下部ハケナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
105	二 再生土層 裏	(15.3) 外側:口縫部コロナメ。体部 ナメ。ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
106	二 再生土層 裏	(4.0) 外側:口縫部コロナメ。体部 ナメ。ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
107	二 再生土層 裏	(13.2) 外側:口縫部コロナメ。体部 ナメ。ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
108	二 再生土層 裏	(16.6) 外側:口縫部コロナメ。体部 ナメ。ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
109	二 再生土層 裏杯	(24.5) 外側:口縫部コロナメ。体部 ナメ。ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
110	二 再生土層 内杯	(27.0) 外側:口縫部コロナメ。体部 ナメ。ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
111	二 再生土層 内杯	19.0 13.9 船部透 12.9	外側:口縫部および体部ヘラ ミガキ。 内面:口縫部ヘラミガキ。船部 ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
112	二 再生土層 内杯	11.7 — —	外側:体部ナメ。 内面:体部ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M
113	二 再生土層 浴台	18.2 15.8 體部透 16.5	外側:口縫部透水。体部 ナメ。ナメ。	褐色 △ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M	△ S M

・凡例 體積 - L 1m以上 M 0.5~1m未満 S 0.5m未満 △-○多量 ○-△多い ▲-△少い ◎-△稀少 ◇-△赤色酸化土 片-結晶片岩

番号	図面 記載	西幅 cm	法縫 (cm) 門溝 腰溝 () 壁元幅	調査・手法		内面 外面	胎		上 地成 厚	過 程	出上位置 参考	
				外面 内面	外面 内面		右 左 直 横 斜	右 左 直 横 斜				
114	二 赤牛上器 鉢	11.7 6.9 1.2	外面: 体筋ナゲ。尻筋側面 内面: 体底面ナゲ。	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	▲ △ △	良好	1/2	第7巻
115	一 赤牛土器 鉢	14.4 6.0 4.8	外面: 肉生の鳥調節子母。 内面: 体底面ナゲ。	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	風化	1/2	-
116	一 赤牛土器 鉢	14.7 6.1 5.2	外面: 体底面ナゲ。 内面: 体底面ハケナゲ。	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	良好	1/2	-
117	二 赤牛上器 鉢	14.7 4.8	外面: つまみから体筋ナゲ。 内面: 体筋ナゲ。	△ △	△ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	-	1/2	-
118	一 草茎器 鉢	15.0 4.4 -	外側: 口縁から大半部が底面ナゲ。 内面: 体底面ナゲ。	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	△ △ △	-	-	-
119	二 草茎器 鉢	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第3章　まとめ

今回の調査では弥生時代後期前半～古墳時代前期初頭および古墳時代後期初頭を中心とした遺構・遺物を検出した。

弥生時代後期前半の遺構としては、堅穴住居（S I - 201）を中心とする居住域の中心部分を検出した。既往調査では弥生時代後期後半の居住域が、調査地の南西および南約150m地点で実施された第1次調査（KF84-1）^{註1}および第6次調査（KF88-6）^{註2}で検出されており、それらを総合すれば、当調査地を中心とした弥生時代後期前半の居住域が後期後半には南部に移動し、集落規模が拡大したことが想定できよう。しかしながら、S O - 201や遺物包含層である第7層からは弥生時代後期後半の土器類が少量出土しており、弥生時代後半段階においても居住域を中心とした活動領域の範囲内に位置していたことが推定できよう。

古墳時代後期初頭の遺構としては土坑・溝・小穴等が検出されたが、出土遺物も極めて少量出土した程度であり、当該期においては、この付近は居住域の一角落を占めるもののやや中心から離れた位置にあったようである。なお、周辺の調査では、同時期の集落は検出されていないが、古墳時代後期後半の集落が当調査地の西約300m地点の第7次調査（KF88-7）^{註3}および南約200m地点の第16次調査（KF94-16）^{註4}で検出されており、古墳時代後期後半期においては、集落の分散と転化が計られたことが明らかである。

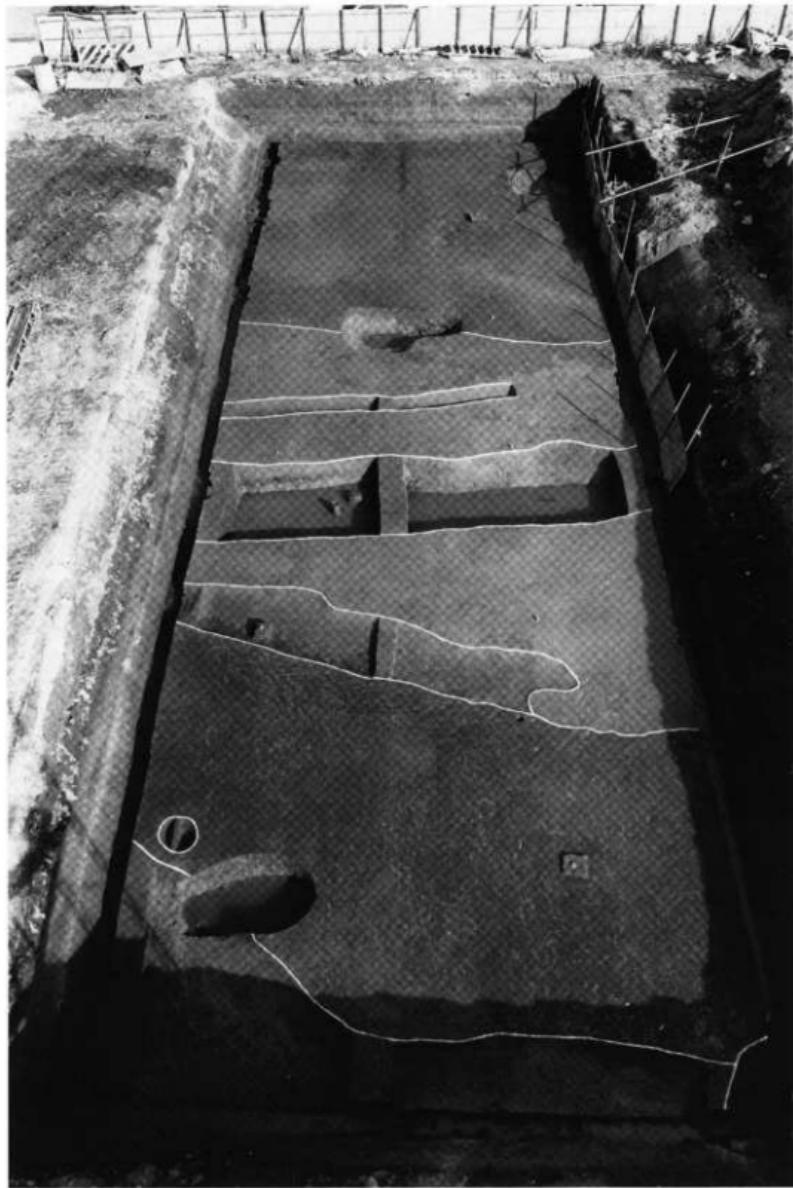
註記

- 註1 原田昌則 1987 「I 壱振跡（第1次調査）八尾市埋蔵文化財発掘調査概要」〔(財)八尾市文化財調査研究会報告13〕〔財〕八尾市文化財調査研究会
- 註2 本書掲載「I 壱振跡第6次調査」
- 註3 本書掲載「II 壱振跡第7次調査」
- 註4 原田昌則 1995 「5. 壱振跡第16次調査（KF94-16）」〔平成6年度〕〔財〕八尾市文化財調査研究会事業報告〕〔財〕八尾市文化財調査研究会

図 版



第2調査面全景（西から）



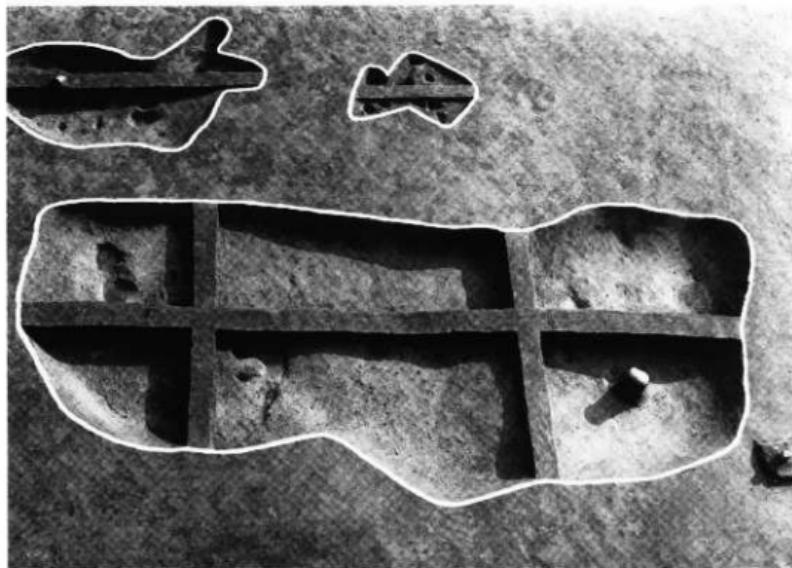
第1調査面全景 (西から)



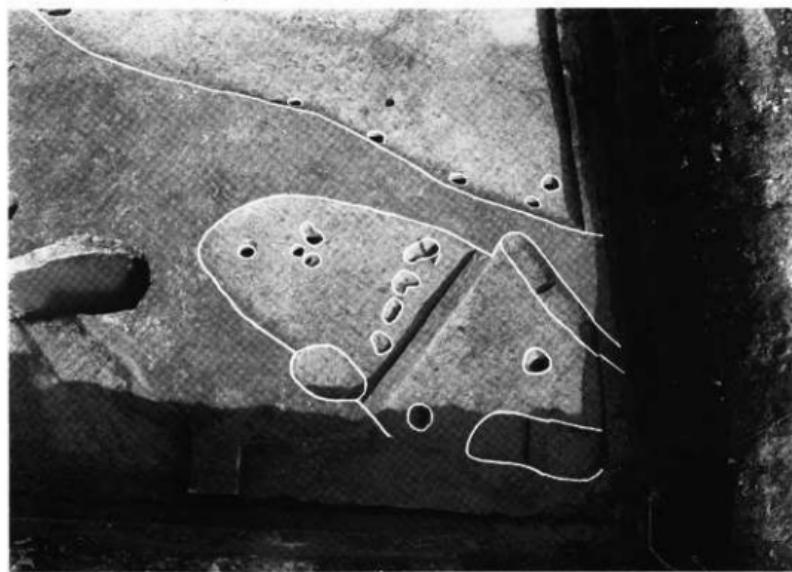
第2調査面東部遭構検出状況（北から）



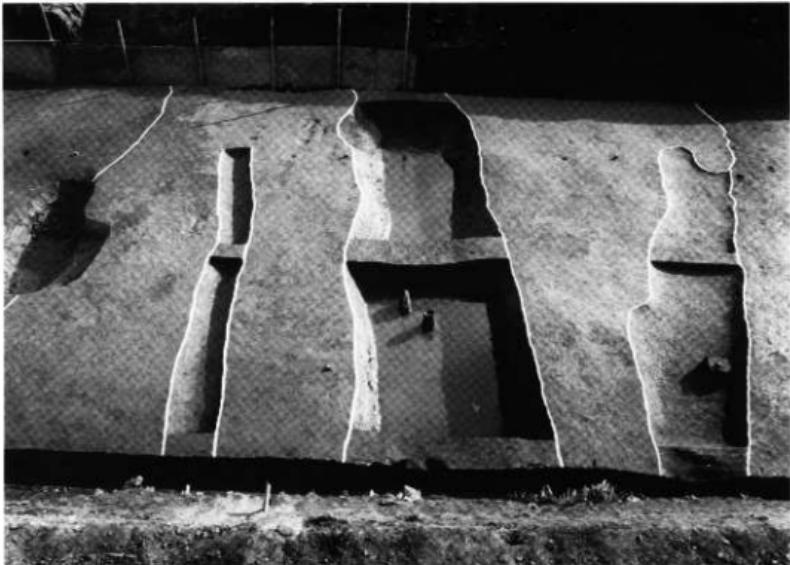
同上 S I - 201 検出状況（東から）



第2調査面 SK-201 検出状況（北から）



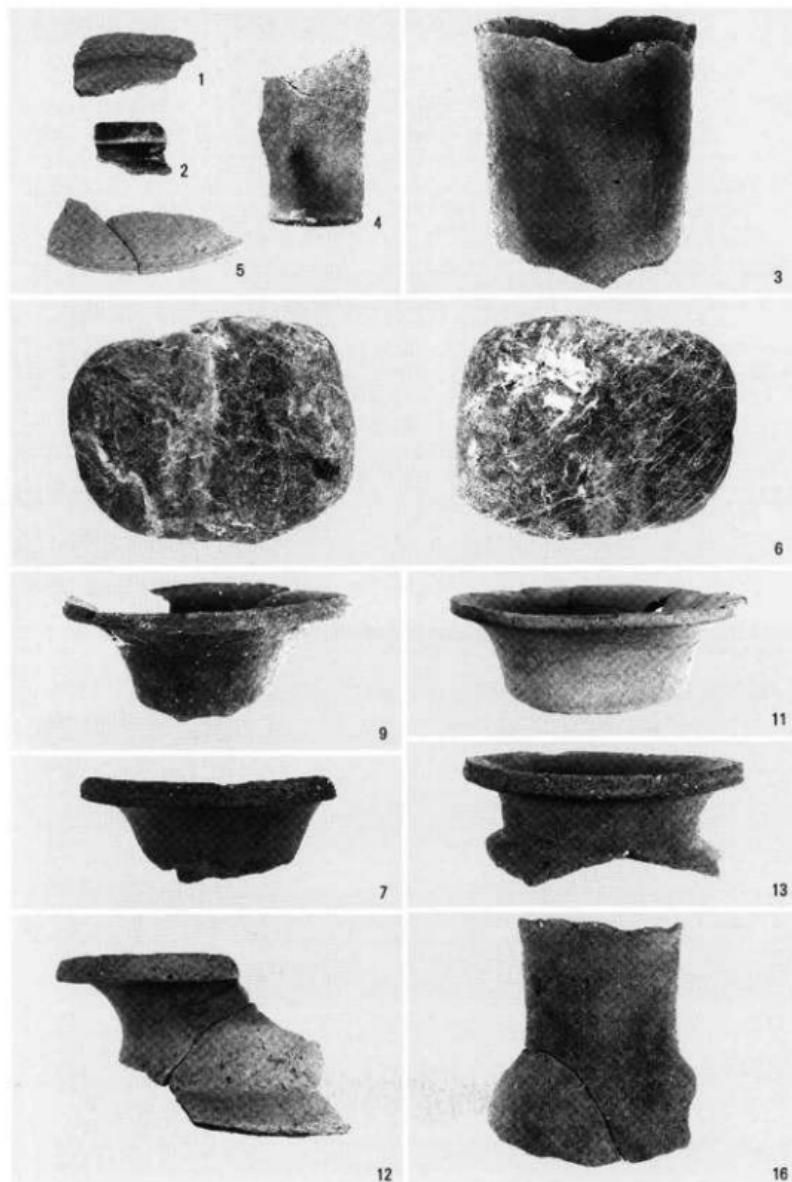
同上 SK-206 検出状況（西から）



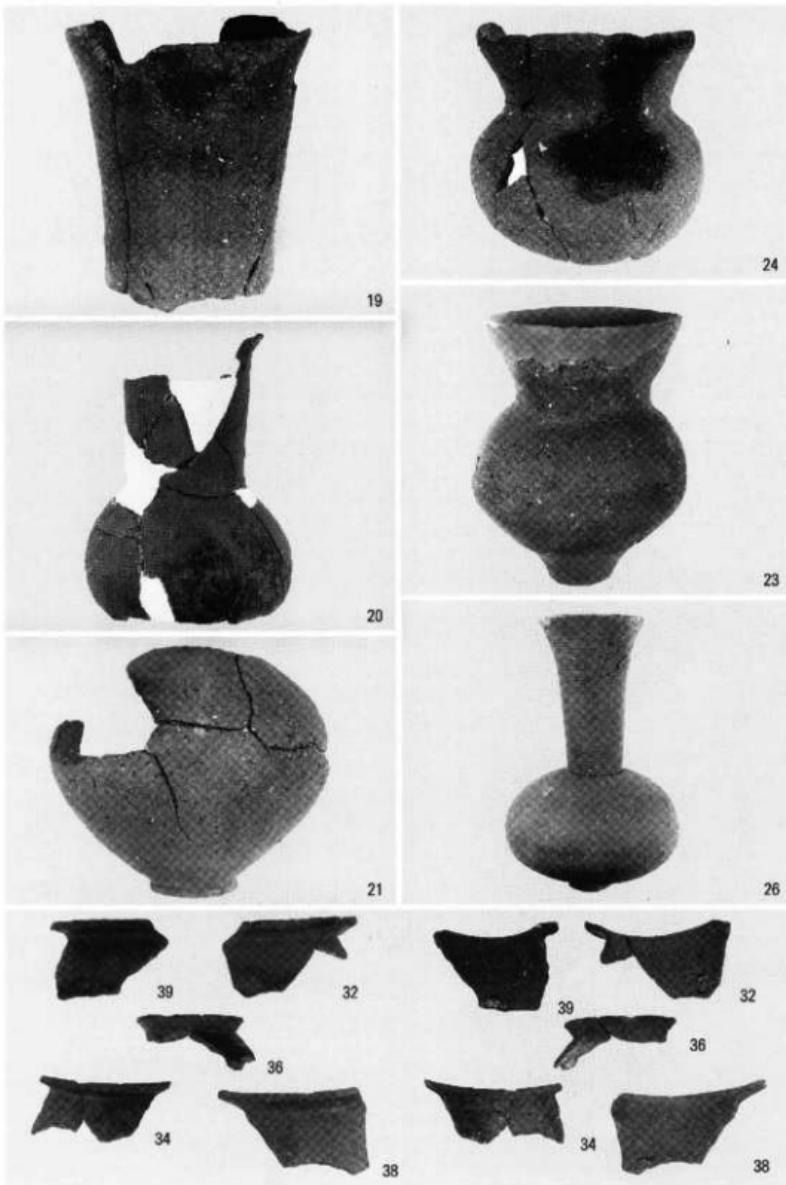
第1調査面 SD-101~103 検出状況（北から）



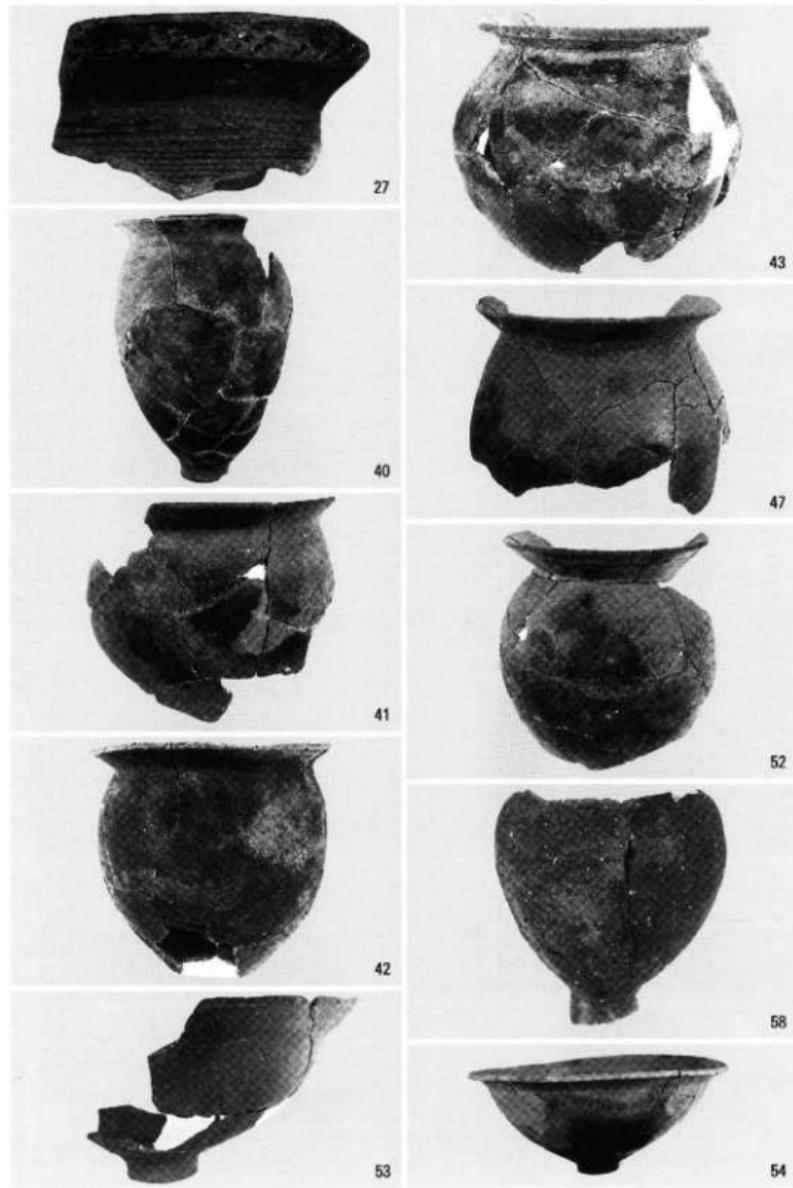
同上 SD-102建基部材出土状況（東から）

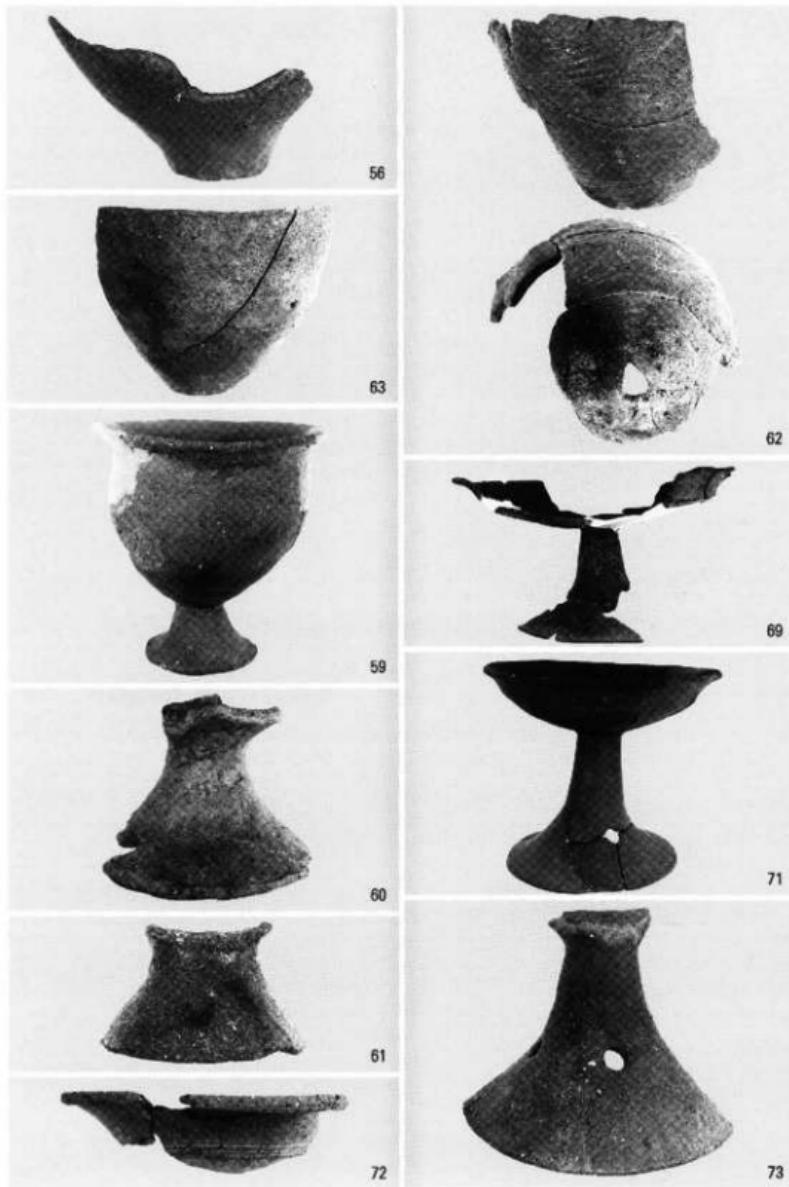


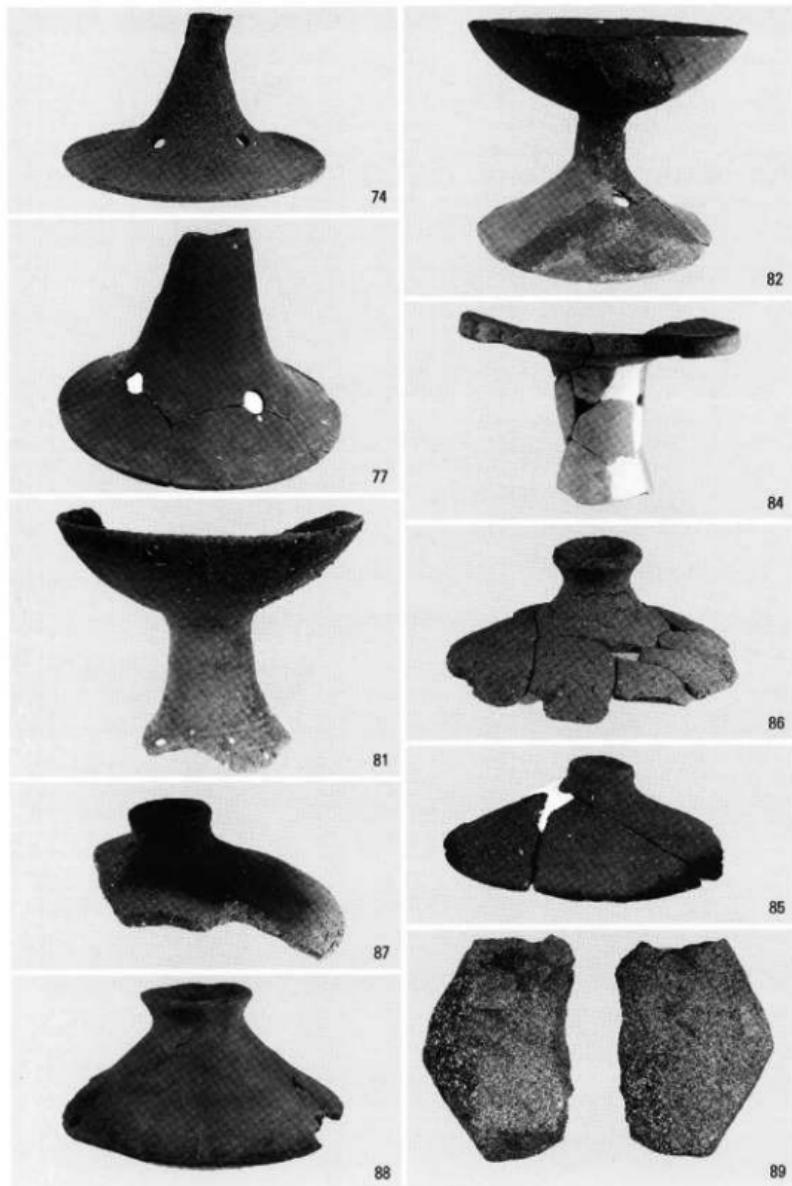
SK-201 (1~6)、SK-206 (7)、SO-201 (9·11·12·13·16) 出土遺物

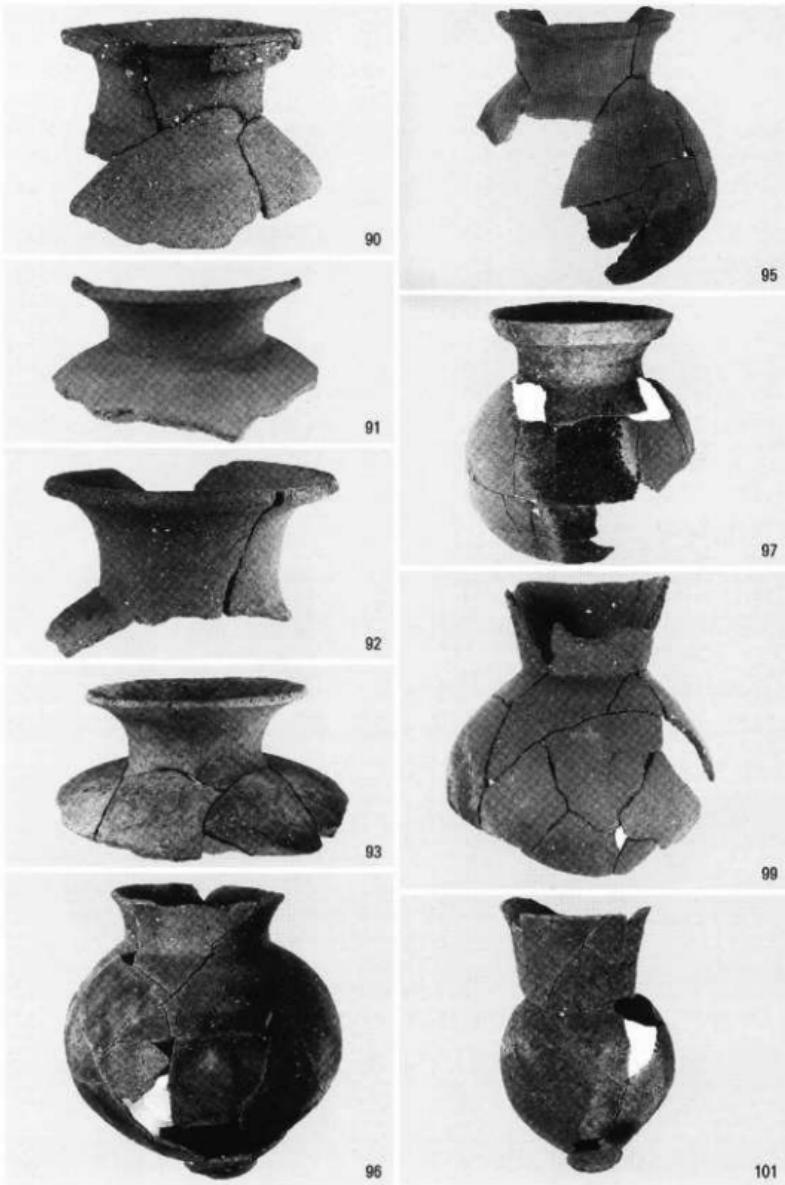


S O - 201出土遺物









第7層出土遺物



102



117



104



113



105



118



111



114



119

IV 萱振遺跡第15次調查 (K F 94-15)

例　　言

1. 本書は、八尾市菅原町1丁目7-5, 7-6, 8-1で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する萱振遺跡第15次調査（KF94-15）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第32号 平成6年4月7日付）に基づき、岩井宏彰氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成6年4月18日～4月27日（実働8日間）にかけて岡田清一を担当者として実施した。調査面積は、約180m²を測る。調査においては大見康裕・吉田由美恵・與儀徳保が参加した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測・北原清子・沢村妙子、図面レイアウト・岡田、図面トレス・北原、遺物写真撮影・岡田が行った。
1. 本書の執筆・編集は岡田が行った。

本　文　目　次

第1章 調査に至る経過	147
第2章 調査概要	148
第1節 調査の方法と経過	148
第2節 基本層序	149
第3節 検出遺構と出土遺物	150
第3章 出土遺物観察表	156
第4章 まとめ	157

挿図目次

第1図 調査地周辺図	147
第2図 調査区設定図	148
第3図 基本層序模式図	149
第4図 検出遺構平面図	151
第5図 SD-201 平・断面図	152
第6図 遺構別断面図	153
第7図 SD-201 出土遺物実測図	154
第8図 SD-202 出土遺物実測図	155

写真目次

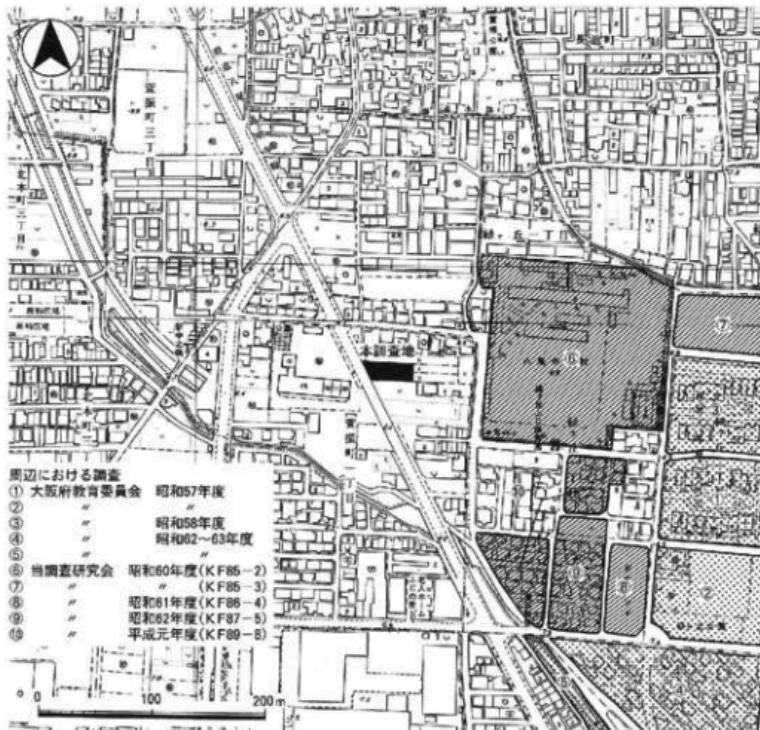
写真1 調査風景（北から）	155
写真2 調査地近景（南西から）	158

図版目次

図版一 第1遺構面全景（東から）	
第2遺構面全景（東から）	
図版二 SD-201（北から）	
SD-201内土器集積全景（西から）	
同 北部（東から）	
同 中央部（東から）	
同 南部（東から）	
図版三 SD-201出土遺物	
図版四 SD-201・SD-202出土遺物	

第1章 調査に至る経過

萱振遺跡は、南東から北西方向に流れる旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。遺跡の推定範囲は、楠根川右岸の萱振町を中心に東西約1km・南北約2kmを測る南北方向に長い地域である。現在の行政区画上では、緑ヶ丘1~4丁目、萱振1~7丁目、泉町1~3丁目、桂町1~3丁目、幸町1・3・4・6丁目に所在する。当遺跡の周辺には、北西に山賀遺跡、南に東郷遺跡が隣接し、北の東大阪市域に至っては、新家遺跡・若江遺跡・瓜生堂遺跡が広がっている。また、当遺跡北部の泉町2丁目に位置する西郡天神社は、飛鳥時代後半から奈良時代頃を中心にこの地域に勢力をもった錦織連一族の氏寺とされる西郡廃寺の推定地が所在する。



第1図 調査地周辺図

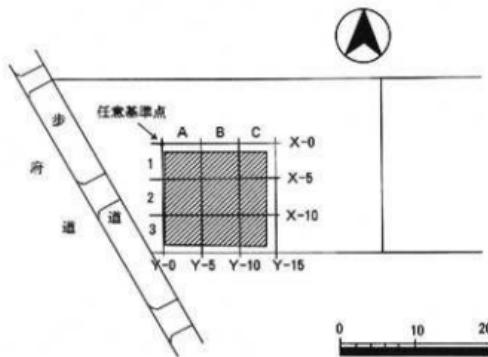
当遺跡は現在までに当調査研究会以外に、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会においても数次にわたる調査が実施されており、弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが判明している。当遺跡内南部では、昭和57年度に大阪府教育委員会によって実施された八尾市緑ヶ丘2丁目所在の府営住宅建設工事に伴う調査において、古墳時代前期初頭に比定される上器棺^{註1}墓を中心とした墓域が確認された。続く翌年の昭和58年度においてもその南側で同教育委員会による府営住宅建設工事に伴う調査で、弥生時代中期の方形周溝墓状遺構が検出されている。さらに同年、同教育委員会によって実施された当遺跡内中央部にあたる萱振町7丁目所在の府立八尾北高校建設工事に伴う調査においては、弥生時代前期から中世に至る遺構が数多く検出^{註2}された。なかでも古墳時代前期に比定される一辺約27mの方墳（萱振1号墳）から発見された日本最大の鶴型埴輪をはじめ盾形・草摺形・家形の形象埴輪類が、河内平野の小規模な方墳から検出されたことは非常に興味深いことである。また府立八尾北高校の西側に位置する地点で、平成3年度に当調査研究会が実施した調査（K F 91-11）では弥生時代後期末から古墳時代初頭の集落域が検出^{註3}されている。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設工事に伴うもので、当調査研究会が萱振遺跡内で実施した第15次調査にあたる。調査対象となった範囲は、八尾市教育委員会が実施した工事範囲における

る遺構確認調査の結果より、建築物の西側部分にあたる東西約14m・南北約18mの面積約180m²である。調査区の地区割りは、土地開発区域内の境界から調査地北西部に任意の基準点を設置し、1区画5m四方で南北方向を算用数字（1～3）、東西方向をアルファベット（A～C）で表示し、地区名をそれぞれ1 A区～3 C区と呼称した。土層の掘削は遺構確認調査資料を参考に、現地表（標高6.7m



第2図 調査区設定図

前後)から1.0m前後を重機によって除去した後、以下0.5m前後を人力によって掘削・遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下1.4m前後(標高5.3m前後)の第10層暗褐色粘土質シルト上面(第2造構面)で古墳時代前期に比定される土坑1基(SK-201)・溝3条(SD-201~SD-203)、標高5.6m前後の第8層茶灰色シルト上面(第1造構面)で古墳時代中期に比定される溝1条(SD-101)を検出した。なお、調査終了後は調査区北壁沿い中央において、1辺2m前後・深さ1.0m前後の規模で下層確認を実施した。

第2節 基本層序

基本層序として上面の現耕作土から下層までを含め、調査区内全域に普遍的に堆積する15層を挙出した。なお、模式図には示さなかつ 現地表(T.P.+8.7m)

たが、調査区南壁の土層観察から現地表下0.8m前後(標高6.0m前後)において層厚0.1m前後を測る細砂層の堆積を確認した。本層はその上下層に含まれる遺物片から勘案して、時期的に平安時代前期頃の河川の氾濫に起因するものと推察される。以下、各層について列記する。

第1層：暗褐色シルト(層厚20cm前後)。現代の耕作土にあたる。

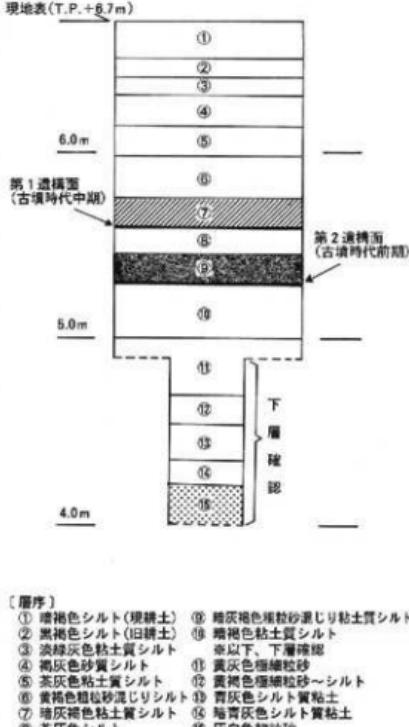
調査区内における現地表は北と南で20cm前後の段差があり、標高は北部では6.7m前後・南部では6.5m前後を測る。

第2層：黒褐色シルト(層厚10cm前後)。旧耕作土にあたる。

第3層：淡緑灰色粘土質シルト(層厚15cm前後)。旧耕土に付隨する床土にあたる。

第4層：褐灰色砂質シルト(層厚20~30cm)。

第5層：茶灰色粘土質シルト(層厚15



第3図 基本層序模式図

～20cm)。中世の遺物片を僅かに含む。古墳時代中期の遺構面まで切り込まれる中世の動溝の埋土でもある。

第6層：黄褐色粗粒砂混じりシルト(層厚30～40cm)。酸化鉄分が含まれる。

第7層：暗灰褐色粘土質シルト(層厚15～20cm)。古墳時代中期に比定される遺物が含まれる。

第8層：茶灰色シルト(層厚15cm前後)。本層の上面(標高5.6m前後)が古墳時代中期に比定される遺構面(第1遺構面)になる。

第9層：暗灰褐色粗粒砂混じり粘土質シルト(層厚15～20cm)。古墳時代初頭(牛内式新相)～前期(牟留式新相)に比定される遺物が含まれる。

第10層：暗褐色粘土質シルト(層厚30～40cm)。本層の上面(標高5.3m前後)が古墳時代前期に比定される遺構面(第2遺構面)になる。

秦以下、下層確認

第11層：黄灰色極細粒砂(層厚30cm前後)。

第12層：黄褐色極細粒砂～シルト(層厚15cm前後)。

第13層：青灰色シルト質粘土(層厚20cm前後)。

第14層：暗青灰色シルト質粘土(層厚15cm前後)。

第15層：灰白色細粒砂(層厚1.0m以上)。湧水が著しい。遺物は包藏されないが、周辺における調査結果から弥生時代後期以前の埋没河川の可能性が考えられる。

第3節 検出遺構と出土遺物

「古墳時代中期」(第1遺構面)

溝(S D)

S D-101

1B区～3B区で検出した。古墳時代前期の溝S D-202をトレースするかのように南北に伸びる溝である。幅1.4～2.4m・深さ0.2m前後を測る。断面の形状は皿状を呈する。埋土は上から上層が黒褐色粘土質シルト・下層が暗褐色粘土質シルトの2層に分層できる。遺物は下層から須恵器蓋杯および須恵器高杯の小破片が出土したが、図化できるものはなかった。

「古墳時代前期」(第2遺構面)

土坑(S K)

S K-201

調査区北東隅1C区で検出した。遺構の北部は側溝を経て調査区外に至っているため全容は不明である。検出部での規模は最大径1.2m・深さ0.11mを測る。埋土は黄褐色シルト質粘土

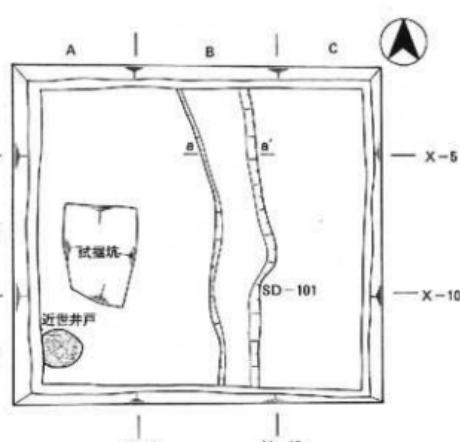
の単一層で、遺物は出土しなかっ

た。

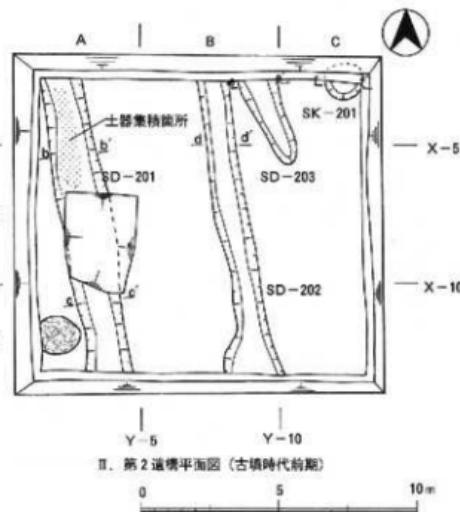
溝 (SD)

SD-201

調査区西部の1A区～3A区で検出した。南北方向に伸びる溝で、幅1.5m前後・深さ0.3～0.4mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は上層が灰黒色シルト質粘土・下層が黒灰色シルト質粘土の2層に分層できる。両層からは布留式中相に比定される遺物が出土し、遺構内埋土では完形品を含む小型壺・大型壺・甕・高杯といった器種からなる土器の集積を検出した。その中から図化できたものは、小型壺4点(1～4)・大型直口壺1点(5)・甕7点(6～12)・高杯12点(13～24)・砥石1点(25)の総数25点である。土器は遺構内埋土の土質または風化の影響からか全体的に摩滅気味で、調整識別の困難なものが多い。形態的に原田分類でみていくと、小型壺(1)は球形の体部に短い口縁部が付く小型壺Cタイプ、(2～4)は半球形の体部から大きくな上方に開く口縁部が付く小型壺B₁タイプに分類できる。大型直口壺(5)は、口縁部が外反気味に伸びる大型直口壺Aタイプに類

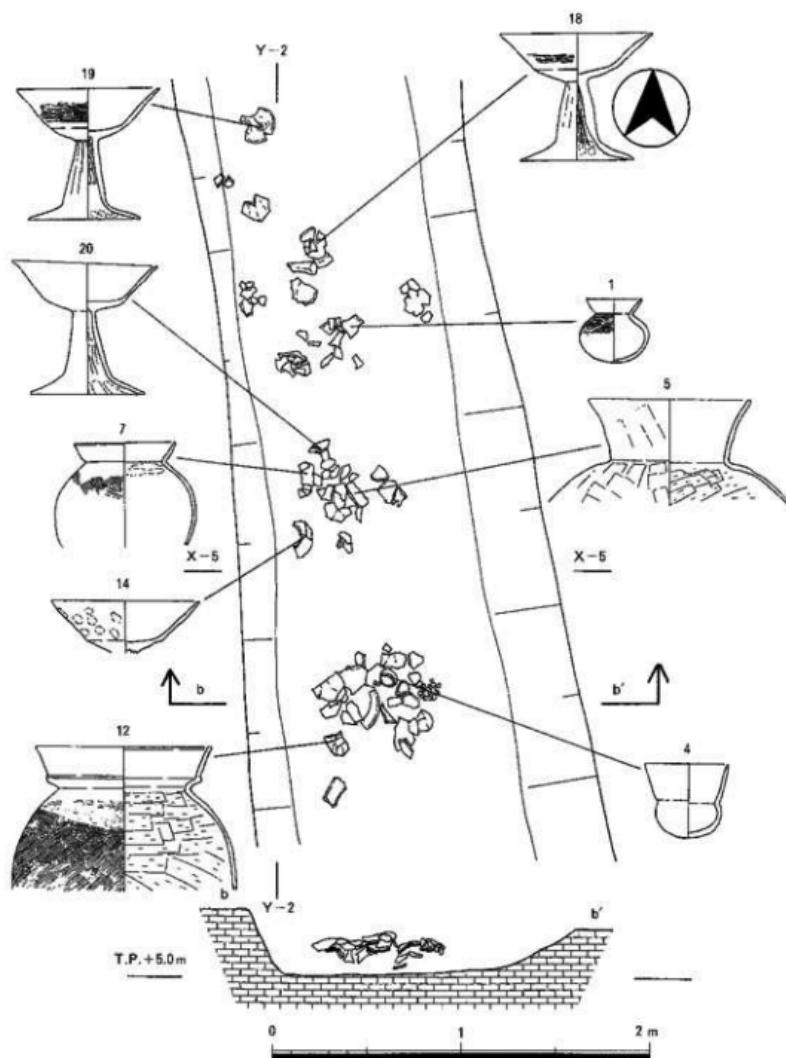


I. 第1遺構平面図 (古墳時代中期)

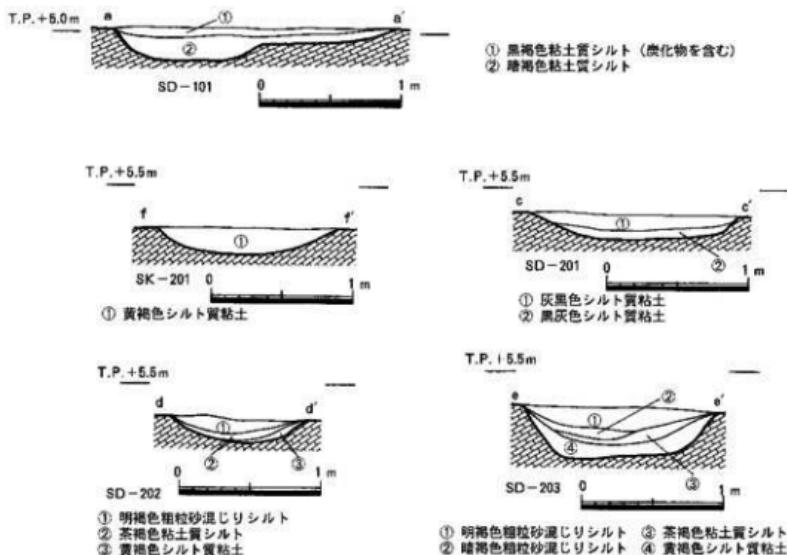


II. 第2遺構平面図 (古墳時代前期)

第4図 検出遺構平面図



第5図 SD-201 平・断面図

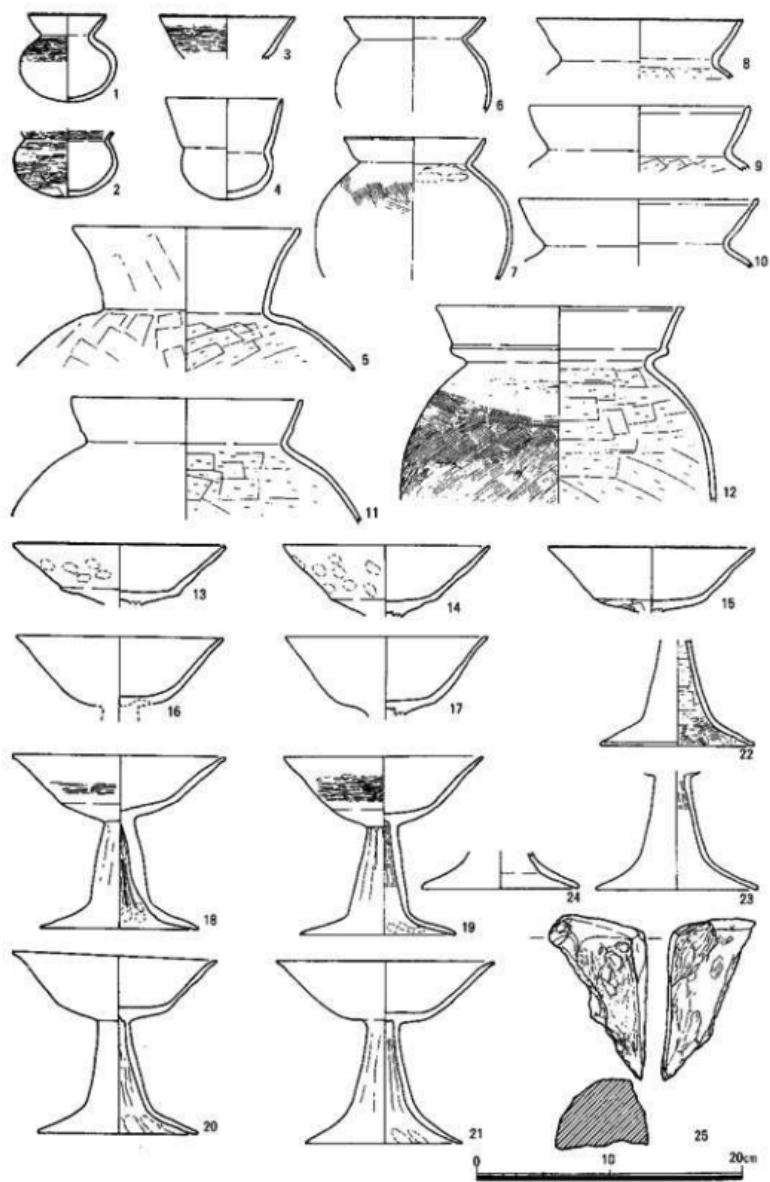


第6図 遺構別断面図

するが、口縁部についてのみ見ると同タイプのなかでは短い部類に属するものである。壺のうち（6～11）は内弯して伸びる口縁部とその口縁部の内側にやや丸身をもつ端部が付くいわゆる布留式壺と呼ばれるもので、分類では壺D・タイプに類する。一方、壺（12）については山陰地方を中心に分布する壺E・タイプになる。高杯（13～24）は弥生V様式の系譜を引くもので、やや水平な杯底部から外反せず直線的に伸びる口縁部が付く高杯A・タイプに類する。以上、SD-201から出土した遺物を原田分類を基に観察した結果、時期的には布留式中相でも新しいところに位置付けられよう。

SD-202

調査区中央部1B区～3B区で検出した。SD-201の東側で南北に並行して伸びる溝である。また、既述したように本溝の上部には古墳時代中期の溝SD-101が重複している。規模は幅1.0～2.2m・深さ0.2～0.4mを測る。断面の形状は浅い梳形を呈する。堆土は第1層が明褐色粗粒砂混じりシルト・第2層が茶褐色粘土質シルト・第3層が黄褐色シルト質粘土の3層に分層できる。遺物は下層から小型壺・甕が出土した。そのうち図化できたものは壺（26～30）の5点である。分類でみると、（26）は口縁端部外面に櫛描直線文が施される古墳地方を中心

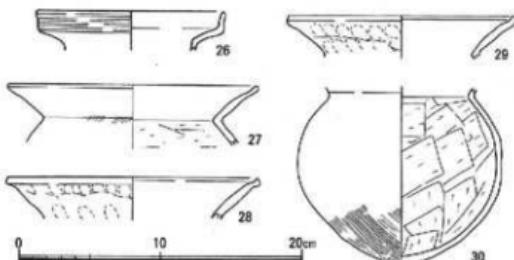


第7図 SD-201 出土遺物実測図

に分布する壺J₁または壺J₂にあたり、(27~30)はいわゆる河内型庄内式壺と呼ばれる壺Bタイプにあたる。溝内から出土した上記の遺物をはじめ図示できなかった小型壺等の他の土器類は、概ね庄内式新相から布留式中相に比定されるものである。

SD-203

調査区北東部1B区~1C区・2B区~2C区で検出した。SD-201およびSD-202に並行して伸びるが、調査区北部で西側のSD-202と合流するものと考えられる。規模は最大幅1.4m・深さ0.3mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は第1層が明褐色粗粒砂混じりシルト、第2層が暗褐色粗粒砂混じりシルト、第3層が茶褐色粘土質シルト、第4層が黄褐色シルト質粘土の4層に分層できる。遺物は第1層から古式土師器の小破片が僅かに出土した。



第8図 SD-202 出土遺物実測図



写真1 調査風景（北から）

第3章 出土遺物観察表

セメント量/重量(%) / 長さ(cm) / 幅さ(cm) / 厚さ(cm) / 種類

遺物番号 部類番号	器種 出土地點	法蓋 cm	蓋高	調査・手法	生葉 外葉 内葉	胎土 量/重量/範例	焼成	保存度	備考
1 三	小吉塙(上野原) SD-201	5.5 7.6	7.5	外面: ハコナデ、ヘラミガキ、ヘラナデ 内面: ロコナデ、ヘラナデ	外: 漆黒色 内: 漆黒色	少/1/石、長	良好	完形	
2 三	同上	—	7.6	外面: ヘラミガキ、ヘラナデ 内面: ハコナデ、ヘラナデ、ナデ	漆黒色	少/1/石、角	良好	体調のみ	
3 三	同上	10.2	—	外面: ヘラミガキ 内面: ロコナデ	漆黒色	少/1/石、長	良好	口缺部 4/5	
4 三	同上	8.8 7.7	—	外表面共に風化が著しいため調査不明	漆黒色	少/1/長、角、赤	良好	3/6	
5 三	広口壺(上野原) SD-201	17.2	—	外面: ロコナデ、ロコナデ後ヘラナデ 内面: コンタキ、ヘラナデ	漆黒色～漆黒色	多/3/石、長、 空、赤	良	1400年 1/3～ 4200 1/4	
6 三	壺(上野原) SD-201	10.5 11.7	—	外面: ロコナデ 内面: ロコナデ、ヘラケズリ?	漆黒色	微/1/長、赤	良好	1/4	外蓋に焼付苔
7 三	同上	10.5 14.8	—	外面: ロコナデ、ハケナデ(12本/cm) 内面: ロコナデ、ユビオカリ、漆合板 1種	漆黒色	多/2/石、長	良好	1/4	外蓋の下 半に黒斑を 有する
8 三	同上	15.4 —	—	外面: コンタキ 内面: ロコナデ、ヘラケズリ	外: 漆黒色 内: 漆黒色	少/2/石、長、 露	良好	口缺部 1/3	
9 三	同上	15.4 —	同上		外: 漆黒色 内: 漆黒色	少/1/石、長、 赤	良好	口缺部 1/6	
10 三	同上	18.0 —	同上		漆黒色	少/3/石、長、 赤、赤	良好	口缺部 4/5	
11 三	同上	17.4 —	—	外面: ロコナデ、肩部剥離不明 内面: ロコナデ、ヘラケズリ	漆黒色	少/1/石、長、 角	良	1/4	
12 四	同上	18.4	—	外面: ロコナデ、ハケナデ(12本/cm) 内面: ロコナデ、ヘラケズリ	外: 漆黒色 内: 漆黒色	多/2/長、露	良好	1/3	外蓋に焼付苔 山詫毛
13 四	萬長(上野原) SD-201	16.0	—	外面: ユビナデ 内面: 風化より調査不明	漆黒色	少/1/砂粒	良好	杯底 1/6	
14 四	同上	15.6 —	同上		漆黒色	少/2/石、長、 赤	良	杯底のみ	
15 四	同上	15.6 —	—	外表面共に風化が著しいため調査不明	漆黒色～漆黒色	少/1/石、長、 赤	良好	杯底 1/4	
16 四	同上	15.6 —	同上		漆黒色	少/3/石、長、 角	良好	杯底 3/5	
17 四	同上	16.2 —	同上		外: 漆黒色 内: 漆黒色	少/1/石、長、 赤	良好	杯底 1/5	
18 四	同上	16.0 13.2 柄部径11.9	—	外面: ハラミガキ、ヘラナデ、ナデ 内面: ナデ、ユビナデ	漆黒色	少/1/長	良好	4/5	
19 四	同上	15.0 13.6 柄部径11.7	同上		漆黒色	少/1/長、空、 赤	良好	4/5	
20 四	同上	15.4 13.5 縦部径12.0	—	外表面は風化により調査不明 内面: 風化により調査不明 内面: ユビナデ	漆黒色	少/1/長、露、 赤	良好	漆黒光形	
21 四	同上	16.4 13.9 縦部径11.9	—	外面: ハラミガキ、ヘラナデ、ナデ 内面: ナデ、ユビナデ	漆黒色	少/1/長、露、 赤	良好	3/6	

遺物番号 既出番号	形・種 出土地点	遺集・口括 (cm) 器容	調査・手法	内調 内面 外面 内面	若上 量/粒径/動物	焼成	遺存状	備考
22	高杯(18625) SD-201	- 河原底11.4	外面:ナゲ 内面:ヘリケスリ、スピオサス後ハケ ナゲ(8本)	表面-吸水性 性	少/2/石、長、 角	良好	頭部のみ	
23	円 上	- 河原底12.2	外面:ナゲ 内面:ナゲ	褐色	多/3/石、長、 角	良好	頭部 3/5	
24	円 上	- 河原底11.6	外面:ナゲ 内面:ナゲ	褐色	多/3/石、長、 角	良好	表面 1/3	
26	盃(土器類) SD-202	13.4 -	外側:7~8条の輪状直線文 内面:マコナゲ	黒灰色	多/1/石、長、 角	良	口縁部 1/8	古備系
27	円 上	17.6 -	外面:マコナゲ、ハケナゲ 内面:マコナゲ	褐色	少/1/長、角	良好	口縁部 1/6	
28	円 上	16.2 -	外面:マコナゲ(2コナゲ)、複合痕1条 内面:ココナゲ	褐色	多/1/長、葉、 角	良好	口縁部 1/4	
29	円 上	16.2 -	同上	褐色	少/1/長、葉、 角	良好	口縁部 1/6	
30	圓 上	- 河原底14.4	外面:下位ハケナゲ 内面:ヘリケスリ	褐色	少/1/長、葉、 角	良好	全体のみ	口縁外輪に刷毛を 有する

第4章まとめ

今回の調査では、古墳時代前期・中期の二時期の遺構面を検出することができた。古墳時代前期については、当地の東側の第2次調査(1985年)、さらに南東の第4次調査(1986年)・第5次調査(1987年)・第8次調査(1989年)^{註6}の一連の調査において同時期の居住域が検出されている。当地の西側については、現在までの八尾市教育委員会が実施している遺構確認調査において生活面の検出を見ない。その要因の一つとして、現在までの周辺の調査成果と地形的状況から旧楠根川側を主流とする大小河川の氾濫の影響が挙げられる。しかし今回の調査の結果、当地から北部および南部については、古墳時代以降の生活面が遺存していることは大過ないであろう。これらの遺物は古墳時代前期に限ってみると、本調査で検出した溝内からは古備および山陰地方にみられる十器が僅かながらも混在しており、当該期における他地域との交流の一端を究明するうえで貴重な資料を提供している。また、遺跡名は兎なるが当地南東部に隣接する東郷遺跡内で昭和62~63年度に大阪府教育委員会によって実施された楠根川改修工事に伴う調査でも、他地域産の搬入土器が数点検出されており、当地との有機的関係に興味がもたれる。^{註10}古墳時代中期については、現在までの周辺における調査を含めて遺構・遺物の希薄さから、その実態については不鮮明であったが、今回の集落域を想定させる土坑・溝の検出は今後周辺における調査の日安の一部になると思われる。古墳時代後期については、先述の第2次調査で6世紀後葉に比定される古墳が検出されていることから、当初本調査地においても古墳に関連し

た遺構・遺物が検出されるものと想定されたが、皆無であった。この要因として既述の旧楠根川側の氾濫による生活面の剥奪、または生活上不向きな土地であったことが推察される。調査区内における層位的な解釈から、当地が比較的安定した土地となり、生産域として形成されるようになるのは中世以降と考えたい。

註記

- 註1 大野薰 1983・3『壹振遺跡発掘調査概要・I 一八尾市緑ヶ丘2丁目所在』大阪府教育委員会
註2 菅田育功 1984・3『壹振遺跡発掘調査概要・II 一八尾市緑ヶ丘2丁目所在』大阪府教育委員会
註3 広瀬雅信 1984『壹振遺跡現地説明会資料I (府立八尾北高校建設工事に伴う発掘調査)』大阪府教育委員会
註4 高萩千秋 1992年『壹振遺跡(第11次調査)』「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要報告」八尾市文化財調査研究会報告34 (財)八尾市文化財調査研究会
註5 原田昌則 1993年『II 久宝寺遺跡(第1次調査)』「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
註6 西村公助 1990年『壹振遺跡発掘調査概要報告』市立八尾中学校体育館建設工事に伴う調査(第2次調査) (財)八尾市文化財調査研究会報告30 (財)八尾市文化財調査研究会
註7 西村公助 1993年『IV 壹振遺跡(第4次調査)』「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 1993年」(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
註8 西村公助 1993年『V 壹振遺跡(第5次調査)』「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 1993年」(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会
註9 西村公助 1989年『II 壱振遺跡(第8次調査:緑ヶ丘1丁目)』「八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告28 (財)八尾市文化財調査研究会
註10 奥和之 1989年3月『東郷遺跡発掘調査概要・I 一八尾市桜ヶ丘・旭ヶ丘所在』大阪府教育委員会

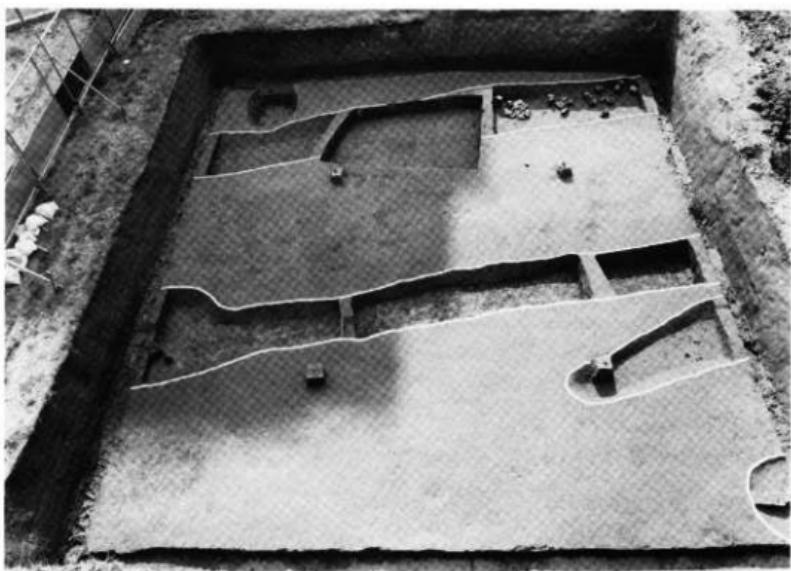


写真2 調査地近景(南西から)

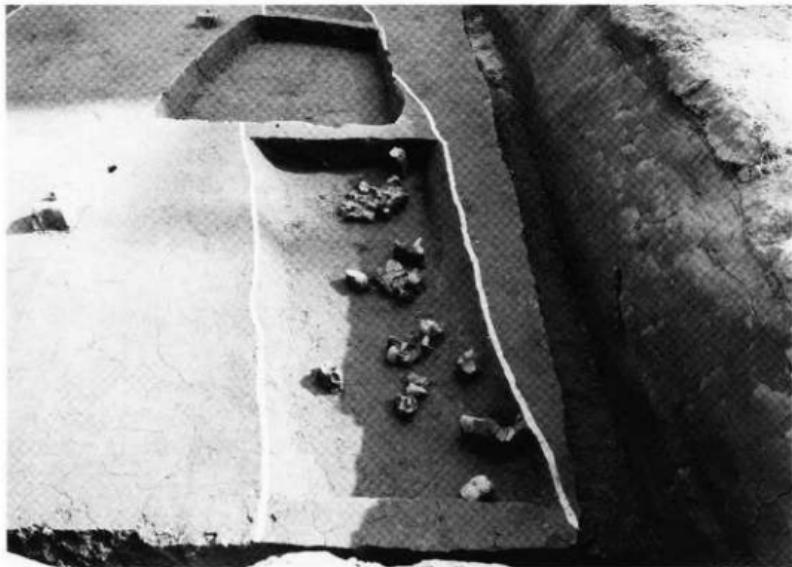
図 版



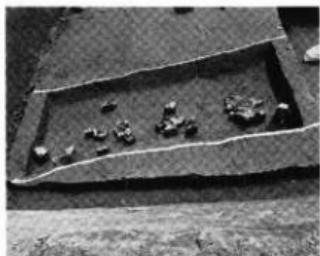
第1造構面全景（東から）



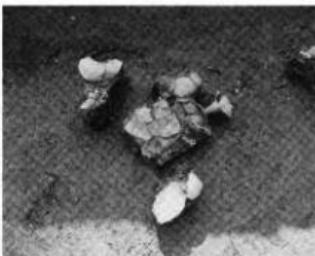
第2造構面全景（東から）



SD-201 (北から)



SD-201内 土器集積全景（西から）



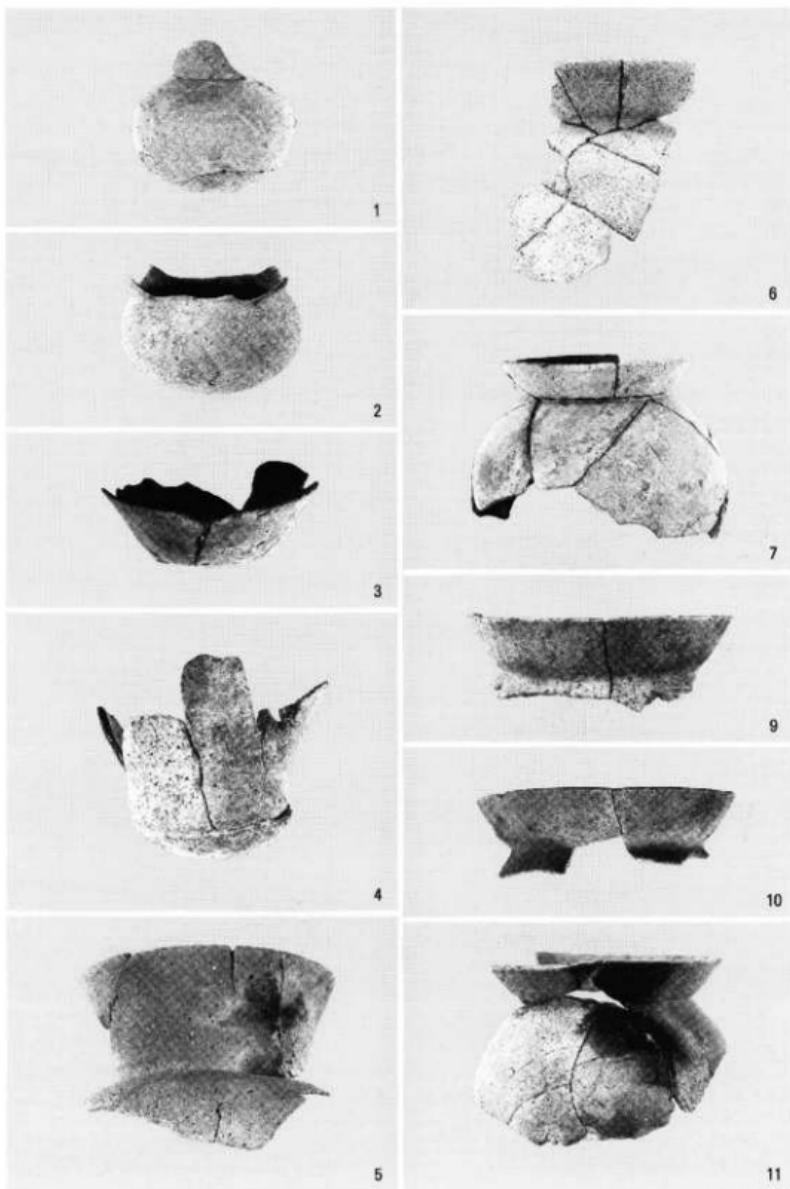
同 中央部（東から）

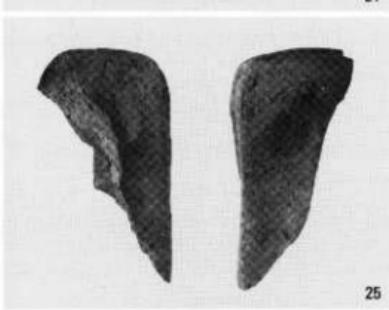
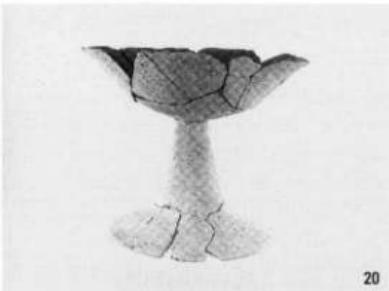


同 北部（東から）



同 南部（東から）





S D - 201 (12·14·17·18·19·20·21·25) 出土遺物

S D - 202 (30) 出土遺物

V 萱振遺跡第17次調查 (K F 94-17)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市壹振町7丁目地内で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する壹振遺跡第17次調査（KF94-17）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋653号 平成7年2月24日付け）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成7年3月13日から3月31日（実働7日間）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は、発掘調査が約11.25m²、立会調査が8.75m²である。
1. 調査および本書作成にあたっては、高柳恵美、村井俊了が参加した。（五十音字順）

本　文　目　次

第1章 調査に至る経過	159
第2章 調査概要	160
第1節 調査の方法と経過	160
第2節 調査概要	162
1) 1区	162
2) 2区	163
3) 3区	163
4) 出土遺物	164
第4章 まとめ	165

挿図目次

第1図 調査地周辺図 (S = 1 / 4000)	161
第2図 柱状図 (S = 1 / 50)	162
第3図 1区・2区設定図 (S = 1 / 500)	163
第4図 3区設定図 (S = 1 / 500)	163
第5図 出土遺物実測図 (S = 1 / 4)	164

図版目次

図版一 1区～3区調査状況

図版二 出土遺物

第1章 調査に至る経過

八尾市域では、都市化が急速に進むなか、公共下水道の整備もまた、急ピッチで進められている。周知の遺跡の範囲内で、八尾市の事業である公共下水道工事が行われる際、八尾市教育委員会および当調査研究会では、事前に、または工事に並行して発掘調査を行っている。

このような情勢下、八尾市下水道部から、萱振町7丁目地内の萱振遺跡において、平成7年2月25日から3月31日までの間、污水栓設置工事（3ヶ所）を行う旨の届出が、市教育委員会へ提出された。工事の予定されている地点は大阪府立八尾北高等学校の敷地内、ここでは昭和58年度に、同校新築に伴って校舎および敷地周囲の水路・道路を対象に、府教育委員会による発掘調査が行われており、多大な成果が得られている。市教育委員会では、当該地での掘削工事には発掘調査が必要であると判断し、同年2月2日付けで指示書作成についての事前打ち合わせをする旨の事務連絡を当調査研究会へ発送した。

これを受けた当調査研究会では市教育委員会と事前協議を行い、当該地の約20mについて、実働9日間で調査を行うことに決定した。次いで、その旨の埋蔵文化財調査指示書（八教社文第埋653-3号 平成7年2月24日付け）が当調査研究会および申請者である八尾市長 山脇悦司宛に提出された。

埋蔵文化財調査指示書を受理した市下水道部と当調査研究会では、同年3月8日、工事請負業者を含めた各担当者間で、工程等を踏まえて、調査の時期や方法等の具体的な内容を打ち合わせ、3月13日から発掘調査を行うことに決定した。なお、この席で、市下水道部の担当者から、3ヶ所の調査区のうち、1ヶ所（2区）については、府教育委員会によって既に発掘調査がなされている地点と重なっているため、今回調査は不必要ではないかという意見が出された。そこで急遽、市教育委員会にその旨連絡し、判断を仰いだところ、2区については立会調査に変更するとの解答を得、調査指示範囲の変更がなされた（八教文第653-4号 平成7年3月8日付け）。変更内容は「調査指示面積の変更」で、「変更前 約20m²」から「変更後約11.25m²（併し変更部分については立会調査を要す）」、変更理由は「調査指示範囲の一部が府教育委員会の調査地との重複が判明したことによる」である。

以上の経過を踏まえ、平成7年3月10日付けで、八尾市教育委員会教育長 西谷信次、八尾市長 山脇悦司、（財）八尾市文化財調査研究会理事長 木山丈司の三者間で協定を締結し、同日付けで府教育委員会を経由して文化庁宛に発掘届けを提出し、平成7年3月13日から発掘調査を行うことになった。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は当調査研究会が萱振遺跡内で行った17回目の調査（K F 94-17）で、調査地は萱振町7丁目地内、府立八尾北高等学校の校舎から道路を挟んで南側にあるバレーボールコート内の1ヶ所と、同校敷地内校舎南側の2ヶ所の合計3ヶ所の立坑（東から1区～3区）である。西端の3区のさらに西側には、当調査研究会実施の第11次調査地（K F 91-11）の敷地がある。

前章で述べた八尾北高等学校新築に伴う発掘調査では、弥生時代前期の埋没河川、同中期の水田、同後期の居住域、古墳時代前期初頭の方形周溝墓を主とする墓域、古墳時代前期の古墳（萱振1号墳）、奈良時代の居住域、平安時代の井戸、鎌倉時代～室町時代の居住域などが検出されている。第11次調査では、弥生時代後期の埋没河川、弥生時代後期～古墳時代前期（庄内期～布留期）^{注1}の遺物包含層、古墳時代中期の遺構面などが検出されている。^{注2}

なお、萱振遺跡全体の地理・歴史的環境等については、本書1 第6次調査 第2章を参照されたい。

今回調査対象となった3ヶ所の立坑のうち、2区については前章でふれたように、府教育委員会によってすでに調査済みであることから、「立会調査」という名目になっている。市教育委員会から指示された調査範囲は、「包含層までの表土掘削範囲0.5m以上、発掘調査包含層等掘削範囲1.0～2.0m前後」ということであるが、工事掘削によって破壊される部分が調査対象であるとの考え方から、1区では現地表以下約2mまで、2区は約3mまで、3区では約5mまでを調査対象とした。

調査の手順としては、まず、工事に先立って、上幅を余分に取り、素掘りで危険でない範囲（現地表以下2m前後）までを調査することにした。1区については、この時点で調査終了となるが、さらに深く掘削する3区については、地盤改良を施した後、土留めをしながら工事に並行して下層調査を進めることにした。2区については、「立会調査」のため、工事を優先的に進めることにした。具体的には、1区の調査を行っている間に2区の地盤改良を並行し、1区の調査終了後3区の上層調査、次に2区の工事を行いながら3区の地盤改良、最後に3区下層部分の調査という順序である。

3月13日、1区の調査開始。同日工事による深度（現地表以下2.0～2.1m）までの掘削を終了した。現地表下1.6m前後で、遺構内堆積土の可能性のある砂混じりシルトが数枚認められた。調査区東側壁面図および調査区位置図の作成、レベル移動等を行い、同日1区の調査を終

了した。なお、同日から2区の地盤改良のための薬液注入工を開始している。

3月14日、3区上層の調査開始、南側半分を掘削。現地表以下1.6~1.7m(旧耕土以下0.2~0.3m)で砂層に至る。砂層には弥生時代後期~室町時代までの遺物が若干含まれていた。1区同様現地表下約2m前後まで掘削したが、砂の堆積が続いている。南側壁面図・調査位置図を作成し、調査終了後南側半分を埋め戻した。翌3月15日、3区北側半分を調査する。北側も南側と同様の結果であった。東側壁面図を作成し、3区の上層調査を終了した。この後入学試験等の学校の行事があり、3月23日まで2区・3区の薬液注入工を行っていた。

3月24日、2区の工事掘削開始、現地表以下1.5m程度までの掘削に立ち会う。掘削する位置は、地下の埋設物などの関係から、当初の予定よりやや北東側に変更された(第3図参照)。現地表以下1.3m前後で遺構内堆積土の可能性のあるシルト~砂を確認した。調査位置図作成および部分的に確認できた層序を図化した後、土留め工に移行した。3月27日、現地表以下1.5~2.5mの範囲を掘削。現地表以下2.1mで水を多く含む粗砂層に至った。3月28日、現地表以下2.5m~3.0mまでの範囲を掘削し、工事を終了する予定であったが、粗砂層からの水量がきわめて多く掘削不能となった。そこで工事の設計を変更することとなり、現地表以下2.8mまでの掘削で工事は終了したことから、その時点での立ち会いも終了した。

3月31日、3区下層部分(現地表以下2.0m~5.0m)の調査開始。現地表以下2.0m前後の砂層以下には粘質シルトと粗砂が交互に堆積していたが、現地表下3.5mで灰色微砂に至った。この層は厚さ0.5m以上を確認したが、水量が極めて多く、時間を延長しても掘り切ることはできなかった。年度末の最終日でもあり、市教育委員会・当調査研究会の判断で、現地表下4.0m程度までの掘削に立ち会うことで調査を終了した。

4月4日、4月3日まで工事による掘削を続けたが、最終掘削深度の現地表下5.0mまで砂の堆積が続いていると現場代理人からの報告を受けた。



第1図 調査地周辺図 (S=1/4000)

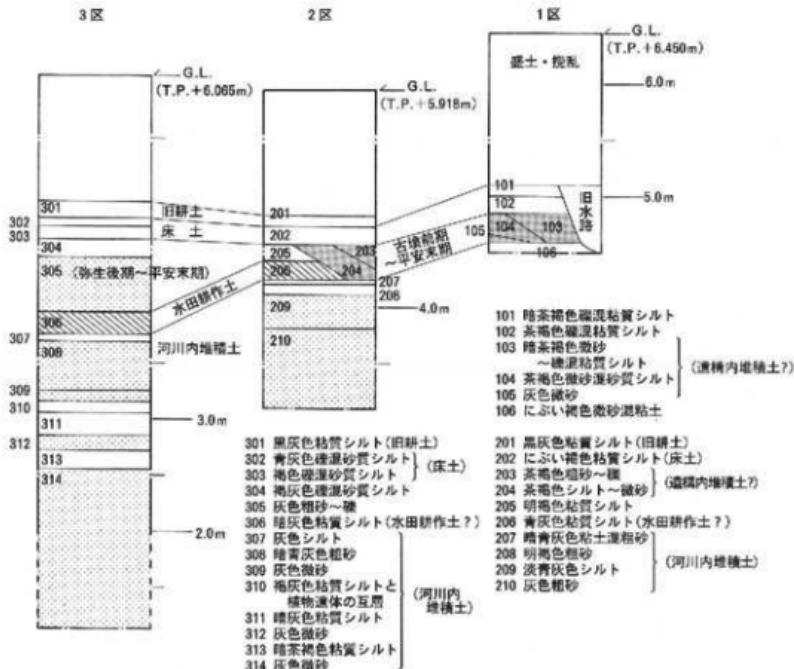
第2節 調査概要

1) 1区

1区は校舎から道路を隔てて南側にあるバレーボールコート内に設定された立坑で、調査のために掘削した面積は約9m²(上幅)である。現地表面はT.P.+6.45mで、道路より1m程度高くなっている。盛土は約1.3mあり、北側では高校建設以前の用水路が盛土以下0.6mの深さまで及んでいた。

それ以下には茶褐色系の疊混じり粘質シルト(101層・102層)があり、その下に103層暗茶褐色微砂へ疊混じり粘質シルト・104層茶褐色微砂疊混じり砂質シルト・105層灰色微砂が厚さ約0.2mの範囲で堆積しており、ついで106層にぶい褐色微砂疊混じり粘土に至る。106層は層厚約0.1mまでを確認した。

これらのうち、103層～105層は部分的に認められたものであることから、遺構内堆積土の可能性があり、103層からは平安時代末期～鎌倉時代初頭に比定される瓦器・須恵器片がごく少量出土している。103層上面のレベル高は、T.P.+4.9m前後である。



第2図 柱状図 (S=1/50)

2) 2区

2区は校舎中央部の南側に位置する立坑で、現地表面のレベル高はT.P.+5.918mを測る。盛土は1.1~1.2mなされており、水道管やガス管埋設時の擾乱がところどころに見られたが、部分的に層序を確認することができた。

盛土以下には、201層黒灰色粘質シルト（旧耕土）、202層にぶい褐色粘質シルト（床土）があり、201層上面のレベル高はT.P.+4.8m前後である。ついで、205層明褐色粘質シルト・206層青灰色粘質シルトを切る形で、203層茶褐色粗砂～疊・204層茶褐色シルト～微砂が堆積している。206層の上面には波状痕跡が認められることから、206層は水田耕作土の可能性がある。この層上面のレベル高はT.P.+4.45m前後、層厚は0.2m前後である。

それ以下には、河川内部の堆積土である207層暗青灰色粘土混じり粗砂、208層明褐色粗砂、209層淡青灰色シルトがあり、210層灰色粗砂に至る。210層は含水量がきわめて多く、層厚は0.7~0.8mまでを確認した。

これらのうち203層・204層は道構内埋土の可能性があり、203層からは古墳時代前期～平安時代末期までの遺物（第5図1~6）が出土している。

3) 3区

3区は高校敷地内の南西隅に位置する立坑で、調査のために掘削した面積は約13.5m²（上幅）である。現地表面のレベル高はT.P.+6.065mで、盛土は1.1m程度なされている。

盛土以下には、301層黒灰色粘質シルト（旧耕土）、302層青灰色疊混じり砂質シルト・303層褐色疊混じり砂質シルト（床土）、以下には304層褐色疊混じり砂質シルトがあり、305層灰色粗砂～疊に至る。305層の厚さは0.5m前後あり、上面には酸化鉄の沈着が著しく、弥生時代後期～平安時代末期までの土器（第5図7他）がわずかに出土している。

その下には、水田耕作土の可能性のある306層暗灰色粘質シルトが堆積している。306層上面のレベル高はT.P.+3.95m前後、層厚は0.2m前後である。以下には、河川内部の堆積土と考えられる307層灰色シルト・308層暗青灰色粗砂・309層灰色微砂・310層褐灰色粘質シルトと植物遺体の互層・



第3図 1区・2区設定図(S=1/500)



第4図 3区設定図 (S=1/500)

311層暗灰色粘質シルト・312層灰色微砂・313層暗茶褐色粘質シルトが約1.2mにわたって堆積しており、最下の314層灰色微砂に至る。308層以下はきわめて含水量が多く、314層の上部からは、弥生時代前期（新段階）の土器片（第5図8）や木片などが出上した。314層は0.5m程度までを確認し、調査を終えたが、最終的には層厚1.5m以上までが確認されている。

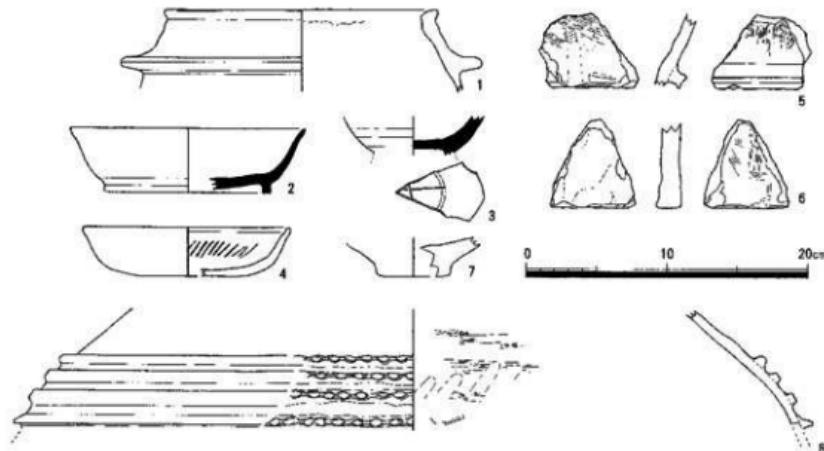
4) 出土遺物

今回の調査では、弥生時代前期から室町時代に至る土器類が出上したが、いずれも小破片ばかりであった。図示したもののうち、(1～6)は2区203層から、(7)は3区305層から、(8)は3区314層からの出土である。

土師器羽釜(1)は口径19.5cm・跨径25.7cmを測る小型のもので、内傾する頸部から短く折り返す口縁部には強いヨコナデが施されている。鍔は短く水平に取り付く。淡橙色～茶褐色の色調を呈し、胎土はやや粗く、焼成は良好である。鍔裏面から体部にかけて、煤が付着する。

須恵器杯(2)は大きく開く口縁部をもつもので、口縁端部はさらに広がる。外底面回転ヘラケズリ、内底面静止ヘラケズリの後全体を回転ナデで仕上げている。口径16.5cm・高台径11.7cm・高台高0.7cm・器高4.5cmを測る。色調は灰色、胎土は密、焼成は良好である。

須恵器(3)は半球形の体部下半のみ遺存するもので、高台または脚台の接合部以下から欠損しており、底部裏面にはヘラ先による「×」印が施されている。回転ヘラケズリの後ナデ・回転ナデ。底径約5.7cm、色調は灰青色、胎土は密、焼成は良好である。



第5図 出土遺物実測図 (S=1/4)

土師器杯（4）は浅い半球形の体部、上方に丸く巻き込む口縁部をもつもので、ナデ・ヨコナデで調整され、体部内面には暗文状の放射状ヘラミガキが施されている。口径14.5cm・器高3.5cm、色調は明橙色、胎土は精良密、焼成は良好である。

埴輪（5）は朝顔形埴輪の一部と考えられるもので、外面には縦方向のハケ、内面には斜方向のハケが認められる。タガの取り付けは強いヨコナデによるもので、表面は凹面を呈している。器表面の色調は淡褐色、中核は灰色を呈し、風化のためか遺存状態は悪く、器表面は磨耗している。（6）は円筒埴輪の底部と考えられるもので、底部端は内へ肥厚している。外面にはおもに縦方向のハケ、内面には指揮さえの痕跡がみられる。色調・遺存状態等は（5）と同様である。

弥生土器（7）は体部から突出する後期の壺底部で、遺存状態はきわめて悪く詳細は不明である。底部径5.2cm・底部の厚みは2cm程度を測る。器表面の色調は赤褐色、中核は黒褐色を呈し、胎土はやや粗い。（8）は前期の壺体部上半の破片で、復元値での最大径55cmを測る大型のものである。布圧痕をもつ貼り付け突帯が1条遺存している。全体をナデ調整、突帯の貼り付けは指ナデによる。外面の色調は明茶褐色、内面は灰褐色、胎土はやや粗、焼成は良好、遺存状態もよい。

第4章 まとめ

今回の調査はきわめて小面積のなかで行ったものであるが、これまで近隣で行われた調査と同様の結果が得られたといえる。溝内堆積土または埋没河川や洪水などに起因すると考えられる堆積土は上下2枚あり、出土遺物や近隣の調査結果から、上層の砂層（103層～105層・203層・204層・305層）は平安時代末期～鎌倉時代初頭以降に、下層の砂層（207層・307層以下）は、弥生時代後期までに堆積したものと考えられる。

註記

- 註1 広瀬雅信 「豊坂遺跡調査報告『八尾市文化財紀要1』」 八尾市教育委員会 1985.3
 註2 高萩千秋 「豊坂遺跡第11次調査」 八尾市文化財調査研究会報告34 1992.4

図 版



1区 機械掘削



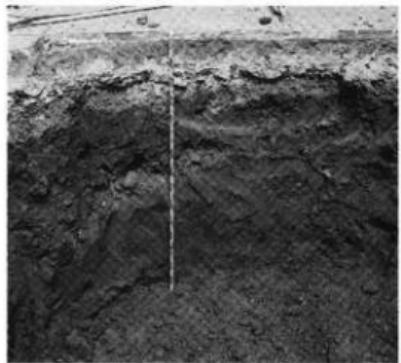
3区 南半部 人力堀削



1区 東側壁面



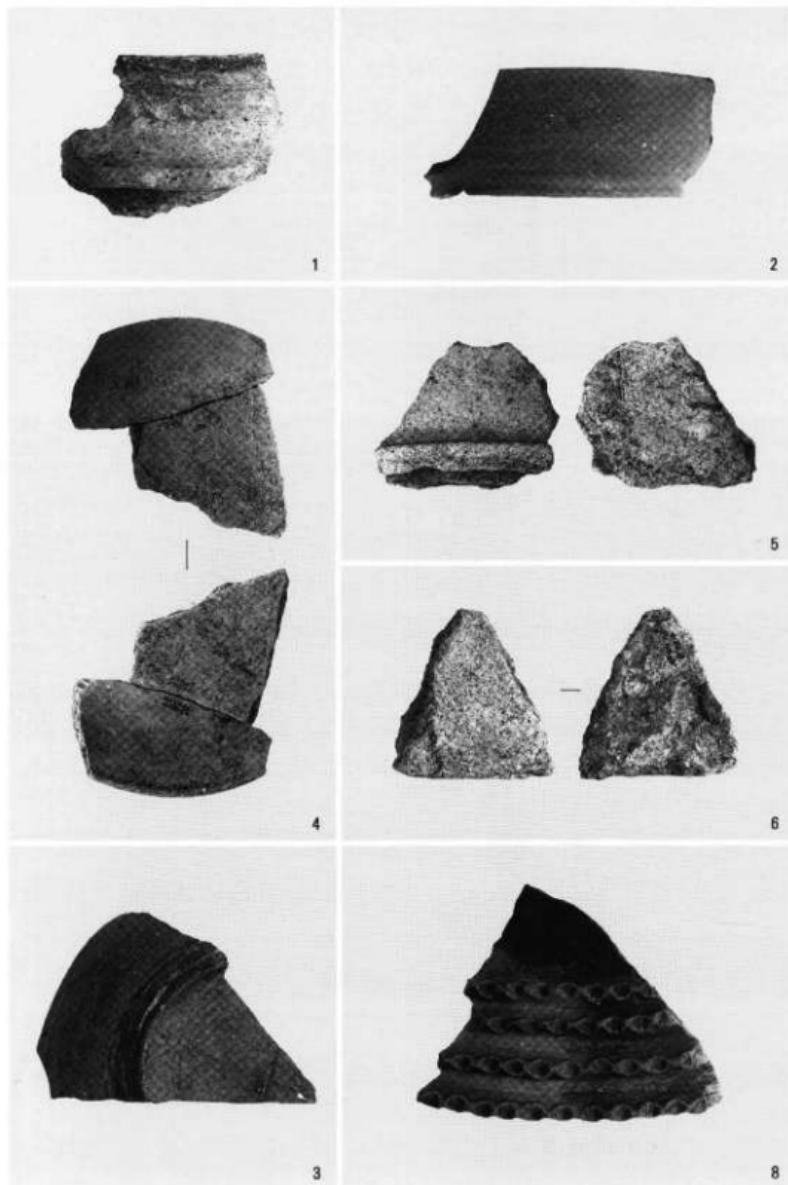
3区 南側壁面



2区 北側壁面



3区 下層北側壁面



出土遺物（1～6－2区、8－3区）

報告書抄録

ふりがな 書名	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきょうかいはうこく 財団法人 八尾市文化財調査研究会報告22						
調査名 番号	I 豊臣道跡(第6次調査) II 豊振道跡(第7次調査) III 豊振道跡(第13次調査) IV 豊振道跡(第15次調査) V 豊振道跡(第17次調査)						
シリーズ名 シリーズ番号	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告 52						
編著者名 編集機関	I・II・III 原田昌則 IV 国田清一 V 成海伸子 財団法人 八尾市文化財調査研究会						
所在地	〒581 八尾市吉山町4丁目4番18号 TEL. 0729-94-4700						
発行年月日	西暦1996年7月31日						
ふりがな 所収道跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡 番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
かやぶり I 豊振道跡 (第6次調査)	おおさかふやおしきいわいちょう 大阪府八尾市吉山町1丁目60-1	27212	34° 38° 40°	135° 36° 31°	19880622 ~ 19880811	320m ²	住宅建設
かやぶり II 豊振道跡 (第7次調査)	おおさかふやおしきいわいちょう 大阪府八尾市吉山町56他11棟・57他6棟	27212	34° 38° 43°	135° 36° 22°	19890201 ~ 19890329	888m ²	事務所付 倉庫建設
かやぶり III 豊振道跡 (第13次調査)	おおさかふやおしきいわいちょう 大阪府八尾市吉山町3丁目80-83	27212	34° 37° 41°	135° 36° 35°	19930201 ~ 19930311	372m ²	住宅建設
かやぶり IV 豊振道跡 (第15次調査)	おおさかふやおしかやふりちょう 大阪府八尾市吉山町1丁目7-5・6、 8-1	27212	34° 37° 58°	135° 36° 33°	19940418 ~ 19940427	180m ²	住宅建設
かやぶり V 豊振道跡 (第17次調査)	おおさかふやおしかやふりちょう 大阪府八尾市吉山町7丁目	27212	34° 38° 21°	135° 36° 22°	19950313 ~ 19950331	11.25m ²	公共下 水道
所収道跡名	種別	主な時代	主な遺構			特記事項	
豊振道跡 (第6次調査)	集落	弥生時代後期・古墳時代初期 難食時代	堅穴住居2・井戸10 土坑2・溝11・小穴 85			壇台形上器の 出土	
豊振道跡 (第7次調査)	集落	古墳時代前期・古墳時代後期 奈良時代	掘立柱建物3・井戸 1・土坑8・溝11			内都庵寺に隣 接した埴瓦の 検出	
豊振道跡 (第13次調査)	集落	弥生時代後期・古墳時代後期	堅穴住居1・土坑9・ 溝6・小穴14・落ち 込み			弥生土器・土師器 須恵器・陶瓶	
豊振道跡 (第15次調査)	集落	古墳時代後期・古墳時代中期	土坑1・溝4			土師器	
豊振道跡 (第17次調査)	集落	弥生時代前期～宋町	自然河川1			弥生土器・土師器 須恵器・縄輪	

壹振遺跡

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告52

- I 壱振遺跡（第6次調査）
- II 壱振遺跡（第7次調査）
- III 壱振遺跡（第13次調査）
- IV 壱振遺跡（第15次調査）
- V 壱振遺跡（第17次調査）

発行 1996年7月31日

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市吉山町4丁目1番18号
TEL・FAX 0729-94-4700

印刷 明新印刷株式会社

表紙 レザック66 <260kg>
本文 書籍1. <70kg>
図版 マットアート <135kg>

